山とスキー

第七十二號

札幌　山とスキーの會　發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
昭和二年五月二十八日印刷納本

昭和二年六月一日發行（毎月一回一日發行）

◇本誌は創刊號より秩父宮殿下の御愛讀を得てをります◇

第七十二號目次

記事

登山史上の人々 —レスリー・スティーブン— 大島亮吉 〔一〕
丘 舘脇操 〔一七〕
夏スキーとその利用 ゲオルグ・ビルゲリー 廣田戸七郎譯 〔二六〕
夏スキー(Sommerski)に就て 山口健兒 〔三二〕
三段滑走練習日記を顧みて 岡村源太郎 〔三八〕
藏王日記 —三枝茂雄君の死— 額田敏 〔四七〕
六年目を送りて 柏木民次郎 〔四七〕
彙報抄錄 山口生 〔五七〕
スキーテクニックの研究 廣田戸七郎 〔五七〕

寫眞版

テイネパラダイスヒュッテ 〔1〕
横尾谷より見たる南岳 山縣浩
カールセン氏の飛躍振り

昭和二年六月發行

テイネパラダイスヒユツテ

登山史上の人々（三）

大島亮吉

レスリイ・スティーブン Leslie Stephen (1832—1901)

レスリィ・スティーブンの名は夙に十九世紀後半に於て英國の生みし碩學として其の The English Utilitarians. 並びに History of English thought in the Eighteenth Century 其他の評論、倫理學、文藝批評、傳記的著作に依りて我等の知る所なるが、又彼れの名は登山史上に於ける『黄金時代』より一八七〇年代に跨りての最も活動的なりし英國登山者の一人としても洵に我等の好く知る所である。即ちスティーブンは一八六〇年より一九〇〇年迄の間に於て登山史上光輝ある彼の英國山岳會の恰も明星として輝きし文學者、科學者の一團中に於ける最も主要なる將星で在つたのである。然して彼れの英國山岳會に於ける活動功績も又甚だ大なるものがあつた。一八五八年十一月二十七日の會合に於て英國山岳會のメムバーと爲りてより、一八六一年——六三年には委員を、一八六四年——六五年には副會頭を、而して一八六六年——六八年には名譽ある英國山岳會の會頭と爲つたのであつた。而して更らに一八六八年より七二年の間は最も彼れの手腕を發輝す可き適任たるアルパイン・ジャーナルの編輯者として英國山岳會の爲めに獻身的盡瘁を致せる所があつたのである。

スティーブンの生涯、其の登山者的經歷を傳ふるものには凡そ左の文献がある。

Alpine Journal vol. XXII. p. 141, In Memoriam, by James Bryce.

The Life of Sir Leslie Stephen, by F. W. Maitland
Memorial Notice, by D. W. Freshfield (The Author, April 1904); F. Harrison (Cornhill, April 1904); J. Bryce (Quarterly Review, April 1904); F. Pollock (Independent Review, June 1904).

スティーブンは一八三二年十一月二十八日倫敦に於て生れ、其の父は State for the Colonies に於ける Under Secretary にして、又劍橋大學に於ける近世史講座の教授たりし Right Hon. Sir James Stephen にして、其の母は Clapham の牧師たる Rev. John Venn の娘 Jane Catherine である。イートン中學(Eton)に學び、進んで倫敦キングス・カッレーヂ(King's College)から更らに劍橋大學のトリニティ・ホールに入りて特待生と爲り、一八五四年席次 20th Wrangler を以つて學業を卒えた。一八五五年には僧籍に入り、一八五六年——六七年はトリニティ・ホールの校友と成り、一八五六年——六二年の間を特別教師(Tutor)の職を勤めた。而して一八六一年——六三年の間は精神哲學の優等試驗の(Tripos)試驗委員と成り一八八三年——八四年の間は英國文學の講座に關しての講師を勤め一八九二年には Honorary Litt. D. の學位を得、一八九五年にはトリニティ・ホールの名譽校友に、一九〇一年には牛津大學より Honorary Litt. D. の學位を贈られた。

一八六七年、有名な小說家 William Makepeace Thackeray の娘 Harriet Marian と結婚したが、不幸にして、彼れの愛妻は一八七五年十一月二十八日に早逝し、其の後四年を經たる一八七八年に M. D. John Jackson の娘にして、辯護士 Herbert Duckworth の寡婦なりし Julia Prinsep と再婚した。スティーブンは其の學生時代には非常に熱心なる運動家にて、一八五二年—五五年の間はトリニティ・ホールの 2nd boot の短艇選手として漕ぎ、又特待學友(don)として同じく同カレーヂの 3rd boot の漕手と成り、カッレーヂ・ボート・クラブにては熱心にして活動的なる會員であつた。又ユニヴーシティ・アスレチック・クラブの創設の爲めに大なる援助を爲し、ランナーとしても歩行者として其の聲名を大學内に知られて居た。彼れの歩行に對する趣味を共に解して居た交友の中には R. Burn, H. A. Morgan, J. Porter の如き後年アルバインクラブのメムバーたりし人々が居た。一八六三年には劍橋大學の經濟學教授として、又一八六三年並びに一八六四年に國會議員として Henry Fawcett を選出せしむるのに大いに盡力した。スティーブンは後者の際には Brighton Election Reporter

を殆んど一個人で編輯し、該選擧期間に其の六號迄を出版した。又彼れは大學改革に對しての熱心な援助者にて、其れに關しては一八六三年に "The Poll Degree from a Third Point of View" なる題下の所論をパンフレットにして發表した。

一八六三年スティーブンは南北戰爭の正に酣なりし北米合衆國を訪れ、北軍の主腦者の數名と知己と成つた。而して一八六二年頃よりスティーブンの神學に對する見解には異常な變化が生じて、爰に彼れが精神生活上に於て顯然たる轉期を劃したので、彼れは身の僧侶たる事に恥ぢて斷然僧籍を脱し、又トリニティ・ホールの校友を辭した。然し尙ほも一八六四年迄彼れは劍橋大學内に止まり、一八六五年一月に到りて始めて倫敦に新居を構え、爰に始めてジャーナリストとして世に立ちて、其の生涯を其の居に送る事に爲つた。先づジャーナリストとして彼れは直ちに Saturday Review と Pall mall Gazette（同紙は一八六五年二月の創刊）の定期寄稿者と爲り、一八六六年には彼の名高きコーンヒル・マガヂンへの長年に亘りし寄稿を開始する事に爲つた。尙ほ此の他スティーブンは同時にフレーザース・マガヂンへの寄稿者と爲り、一八七〇年以後にはフォートナイトリイ誌へも稿を送つた。

一八七一年より一八八二年の間をスティーブンは有名なコーンヒル・マガヂンの編輯者として彼れの卓越せる手腕を示し、一八八二年には更らに彼れの名を不朽と爲せし Dictionary of National Biography の編纂に携り、一八八九年彼れの健康が其れを許さ無く爲りし時迄其の爲めに盡瘁した。一八八九年以後は Sir Sidney Lee と共に尙ほ編纂の仕事は止めなかつたが、一八九〇年以後は完全に其の地位を退讓した。然し一九〇〇年に同辭書の完成を見る迄スティーブンは尙ほ稿を送る事は中止せず、此の間に彼れの諸傳記に關する稿は總數三七八稿一千頁以上の多量に上りて、同辭書の寄稿者中シドニー・リーを除いては彼れより勝る稿の多數な寄稿者は無いのである。一八六八年に再度北米訪遊を試み、一八九〇年又僅かの期間同地を訪ひし他、スティーブンはアルプスを訪れる他に倫敦を去りし事は無かりしと謂ふ事である。

一九〇二年にスティーブンは非常な重病に罹つた。然し尙ほ彼れの文筆的活動は彼れの生涯の眞の終極迄續けられたのであつた。彼れは一九〇三年には牛津大學に於ける Ford Lecturer に任ぜられ『十八世紀に於ける英國文學と英國社會』

3

なる題名の名高き講演を爲し、又同年の後期四ケ月に亘つて『ナショナル・レヴィュウ誌』に Early Impressions なる稿を四回に亘りて掲載した。スティーブンの最後の文筆的仕事はトマス・ホッブスの傳に關して一著であるが、之れは彼れの歿後に出版された。スティーブンは一九〇四年二月二十二日に逝いた。其の時彼れはロンドン・ライブラリイのプレシデントであり、左の學位を有して居た。即ち

Honorary D. C. L. Harvard, 1990; Hon. D. Litt. Oxford, 1901; K. C. B, 1902.

である。スティーブンの著書は甚だ多いが、然し此處では主として彼れの登山者としての生涯を傳ふるのが主なる目的であるが故に唯だ書名を擧記するに止める。

Sketches from Cambridge, by a Don (1865)

The Times and American War, a Historical Study (1865)

Essays on Free-thinking and Plain-Speaking (1873, new edition, 1905)

Hours in a Library (1st series 1874, 2nd edition, 3 vols, 1892)

History of English Thought in the Eighteenth Century (2 vols., 1876, 2nd edition, 3 vols., 1902)

The Science of Ethics (1882)

Life of Henry Fawcett (1885. 2nd edition, 1886)

An Agnostic's Apology and other Essays (1893, 2nd edition, 1903)

Life of Sir James Fitz James Stephen (1895)

Social Rights and Duties (2 vols. 1896)

Studies of Biographer (4 vols., 1899 and 1902)

the English Utilitarians (3 vols., 1900)

English Literature and Society in the Eighteenth Century (Ford Lectures, 1904)

Samuel Johnson (1878); Pope (1880); Swift (1882); George Eliot (1902); Hobbes (1904) in the 'English Men of Letters' Series

扨て以上はスティーブンの登山者として以外の彼れの生涯を極めて概括して略記したに過ぎぬものである。之れより以下は彼れの登山者としての經歷に移らう。

スティーブンの登山經歷は一八五五年即ち彼れが劍橋を出でたる年の夏、彼れが獨乙に旅行し、ハイデルベルヒに數週間滯在後、ミューニッヒを經てベルヒテスガーデンを訪れ、同年八月十九日ケーニッヒゼー、オーバーゼーの風光を訪ひ、其の後ザルツブルク（八月二十日）、Hallein（八月二十二日）、Hof St. Gilgen（八月二十三日）、シュラーフベルヒ登山—Ischl（八月二十四日）、Aussee（八月二十五日）、Gosausee, via Abtenau to Golling（八月二十八日）、Bad Gastein（八月二十九日）、Niedere Tauern より Malnitz 並びに Obervellach（九月二日）を經て、九月三日名高いハイリーゲンブルート（Heiligenblut）に來り、Pasterze 氷河に近く迄登つてグロッス・グロックナーの山下に到り、危き所で災禍を逃れ、斯くて九月四日グロッス・グロッナーの登山を中止して、Heiligenbluter-Hochtor を越えて Zillertal の Gerlos, Zell を九月五日に過ぎ、九月六日インスグルックに出でて旅行を終りたるアルプス山下の旅行に始まるのである。此の翌年一八五七年よりスティーブンの眞實のアルプス登山の大なる記錄は開始せられ、其は一八七六年迄續き、其れ以後のアルプス訪遊は一八九四年の永きに迄續いたのであつた。

而して彼の『黃金時代』より一八七〇年代に掛けてスティーブンの爲せし其が登山の記錄は、洵に幾多のアルプスの峻嶮難頂の初登頂、困難なる鞍部の初通過を含みて登山史上の山頂征服の記錄に於ても亦赫奕たるものである。試みに左にスティーブンの爲せしアルプスに於ける初登頂、初通過の多き、不朽なる記錄を擧記して見よう。

一八五七年　此の年は未だスティーブンの眞の活躍は無く、モン・ブロンの近隣に於て一ケ月を送り、F. Galton と共に Col du Géant をクールマユールより登つた。

一八五九年　F. P. Koe と共にツウリッヒより Vorauen へ八月五日に行き、同地にて E. S. Kennedy, J. F. Hardy, T.

W. Hinchliff と會合。此の三先覺がスティーブンに、彼れ自身記する所に隨つて言へば、'helped to introduce me to the mystery of climbing' のであつた。此のバァティは八月十二日 Saas berg の登山を爲し、八月十四日 Töti を試み、八月十五日 Klausen pass を越え、八月十六日 Bristenstock の無案内者登山を爲した。（ヒンチリッフは當時既に右手を失つて居たので加はらなかつた。 Peaks, Passes and Glaciers. vol. I. p. 167—8 參照。）八月十七日 Susten pass——八月十八日 attempt on Trifthimmi——八月十九日ゲリムゼル・ホスピス——八月二十日オーベラールヨッホ（Alpine Journal, vol. XXXII. p. 240）——降雪後八月二十一日より二十三日迄の間に Eggishorn を登頂。八月二十五日マットマルクを訪れ、八月二十七日にはリッフェルベルクに來り、二十八日ケネディを除いて總べてはモンテ・ローザ登山。（A. J. vol. XXXI, p. 320, 'Life of Sir Leslie Stephen, p. 83 脚註參照。）八月三十日スティーブンのみヘルンリィを訪れ、九月二日ハァディ、ヒンチリッフと共にアドラー・パスを越え、而る後ヒッチリッフのみと Zwischbergen pass を越えて九月三日 Isella へ行つた。（ハァディは恐らく九月七日迄彼れ等と同行せしものであらう。）スティーブンのジョン・ホノールのウェスターン・アルプスに爲せしノート p. 254 並びに Guide des Alpes Valaisannes, iv. p. 94 參照）九月六日エッギスホルン。而る後シュワーレンバッハ。九月十一日 Wildstrubel の東よりの初登頂並びに西頂か或ひは南頂の初縱走（Peaks, Passes and Glaciers, vol. I. p. 336—40 參照。）九月十二日 Hahnenmoos と（そして Bonder Krinden?）を越えてカンデルシュテーク——九月十二日 Düudengrat（Holtürli pass）及び Sefinenfurgge——九月十三日シュトラールエック——九月十五日ガーレンシュトック——九月十七日ガウリィ・パス（Ball's 'Central Alps', p. 124—5, Studer, Ueber Eis und Schnee, Vol. I. p. 508 參照。）ヒンチリッフは此の旅行の終局迄スティーブンと共に有りしが如きも該點に關して確實に言明する事は不可能事である。

一八五九年　マシュウス兄弟（G. F. 及び William）と共に八月一日英國を立ちて後、單獨にてシュワーレンバッハへ九月三日に赴き、又引き返へして、九月四日チンゲル・パスを越えて、ラウターグルンネンにてマシュウス兄弟と會ふ。斯くて彼れ等はアイガーヨッホ（3,703m）をシャモニイの案内者ジャン・バプティスト・クロッツ（Jean-Baptiste Croz）並び名高いラ

ウターブルンネンの案内者ウルリッヒ・ラウエナー（Ulrich Lauener）を伴ひて、八月七日に初通過した。（此の時の登山に關してスティーブンはアルパイン・クラブのメムバーの前にて紀行を讀み、其れは Peaks, Passes and Glaciers, Vol. II に掲載され、其の後にスティーブンの著 The Playground of Europe の第三章として The Eiger-joch なる章題下に於て再び收錄せられてある。）

八月九日レッチンリュックを越え、八月十日ペータースグラート。スティーブンのみはレッチン・パスを再び越えて、キッペルに歸り、八月十二日ベルネーズ・オーバーランド第十一の高峰ビーチホルンの最高頂（Bietschhorn: höchsten Gipfel. 3,953m）を、スティーブン自身の他唯だ案内者としてキッペル（Kippel）のヨハン・ツュウクラー（Johann Zügler）荷擔ぎとしてツュウグラーの義兄、並びにヨセフ・アッペナー（Joseph Appener シュトゥーダーに依ると Ebener）を伴ひて初登頂した。（此の登山の記述は Alpine Jounal vol I に掲載せられしが、被れの著 The Playground of the Europe には如何なる理由にや收錄せられざりしもので、一九一三に到り Arnold Lunn (edited) の The Englishman in the Alps. Being a Collection of English Prose and Poetry relating to the Alps. 中に始めて再錄せられた。）八月十四日レッチエンリュック。

J. Birkbeck, R. Liveing 並びにヒンチリッフ其他の人々と共にエッギスホルンに於て會合。八月十七日バークベックと共にベル・アルプに其の時殆んど完成せる新しきホテルを見る爲めに訪ね、八月十八日より二十四日迄足を痛めし爲め休養。八月二十九日ヒンチリッフ、ライヴィングと共に Weismies の第二（英國登山者として最初の）登頂。（A. J. vol. IX. p. 29, Ball's 'Western Alps', p. 375, Studer's vol. II. p. 341—2 參照。）九月二日ブライトホルン（アルピナ 1915, p. 114 參照）。九月三日 Mettelhorn 恐らくライヴィングと共に。九月七日 Dom の第二登頂（A. J. vol. XXXII. p. 203, Ball's 'Western Alps', p. 322, Studer's vol. II. p. 119 參照。）九月九日ライヴィングと共に Rimpfischhorn の初登頂（A. J. vol. XXXII. p. 213, Ball's 'Western Alps, p. 322, Studer's vol. II. p. 278 參照）九月十二日ライヴィング並びに J. Ormsby と共にツィスホルンの試登を爲した。（A. J. vol. XVIII. p. 33 參照）テオドゥル峠、グラン・サン・ベルナール峠及びテート・ノアールを越えてシャモ

ニィに到りしが、父の訃報に接して急據倫敦へ歸つた。

一八六〇年　七月十三日倫敦を去り、七月十六日 Mettenberg 登山。七月十七日オーバー・グリンデルワルト氷河の下部を渡り、其の『甚だ困難にして且つ危險なる通過』はクリスチアン・アルマーの遭難を釀した。(アルマーの Führerbuch (寫本再刻) p. 74 參照°) 七月二十三日 W. F. Short と共にヴェッターホルン登山 ('Playground' 終章 The Regrets of a Mountaineer, p. 290 參照°) アルマーの負傷快癒迄グリンデルワルト滯在。其の間フアルホルン、ゲムスベルクに登り、然る後ショートと共にゲンミイ峠を越えてツェルマットへ赴いた。七月三十日 Schwarzberg-Weisstor を越え、七月三十一當時未だ越えられざりし Alphubeljoch を越えんとして Fée 氷河に於て霧の中を一日費した。八月一日ショート、J. Fisher, F. W. Jacomb と共に新登路より Allalinhorn の第二登頂を爲し、該頂を横斷してツェルマットへ降りた。(A. J. vol. XXXII. p. 215 參照° 尙ほスティーブンは上記二登山に關して Vacation Tourists, 1860, chap. VIII に記文を揭げた°) 八月四日 H. B. George と共にゴルナー氷河を訪ね、リッフェルホルンに登り、八月六日ダン・ブランシュの登山を試みた。(Alpina, 1915, p. 114 參照°) 八月八日ヒンチリッフと共にメッテルホルン登頂 (Peaks, Passes and Glaciers, vol. II. p. 499 參照°) 八月九日ヒンチリッフと共に、Alphubelhorn の初登頂並びに Alphubeljoch の越え得可き事を證した。(A. J. vol. XXXII. p. 214, 'Vac. Tourists', 860, p. 281 Ball's 'Western Alps', p. 357—8, Studer's, vol. II. p. 271 參照°) 八月十三日ライヴィングと共にモンテ・ローザの Zumsteinspitze の第四登頂 (一八二二年來後最初の) を爲した。(Peaks, Passes and Glaciers, vol. II. p. 379 參照°) 八月十九日スティーブン兄弟にてユンクフラウ登山 (A.J. vol. XXXII. p. 225. Life of Sir J. F. Stephen, p. 96 參照°) 八月二十日ライヴィングと共にオーベラールヨッホ。八月二十二日 Siedelhorn 八月二十三日オーベラールホルンの最初の記錄的登頂 (Peaks, Passes and Glaciers, vol. II. ii. p. 14, Studer's vol. I. p. 107. and III. p. 425 參照°) インターラーケンを經て、カンデルシュテークに至り、ライヴィング、ストーン (Stone) と共に八月二十七日案内者マイリンゲンのメルヒオール・アンデルエック (Melchior Anderegg) 並びにシャモニイのピエール・シモン (Pierre Simond of Chamonix) カンデルシュテークのフリッツ・オギィ (Fritz

Ogi) を伴ひてブリュウム●リスアルプホルン (Blümlisalphorn, 3,670m.) に初登頂した。(此れに關する記述はスティーブン自身の筆に成りしものは無きが如くであるが、アルパインクラブにて講演を爲した。) 八月三十日、ストーンと共にアルテルス登頂。(Alpina, 1915, p. 114 參照)

一八六一年 C. Hudson, J. Birkbeck, Jun., 及び F. F. Tuckett と共に七月十日 Col de Miage より Dôme du Goûter に登らんと試んとして、Col 迄達せしが、バークベックの災禍に遭ひし爲め登山を其れ以上中止した。(Peaks, Passes and Glaciers, vol. II. i. p. 28 參照。) シャモニイよりコル●ドゥ●デュアン往復。七月十八日 タッケットと共に眞實の St. Gervais 路 (即ち Aiguille and Dôme du Goûter and Bosses du Dromédaire を登る) よりモン●ブロンの最初の完全な登頂を爲した。(William Longman, Modern Mountaineering and History of Alpine Club, p. 18. C. E. Mathews, Annals of Mont Blanc. p. 205 參照) コル●デラン、新ワイストール、リードバス (Ball's 'Westesn Alps' に對するスティーブンのノート p. 360—1 參照。) 七月二十九日 A. A. Reilly と共に Lyskamm の東稜 Lysjoch, Betliner Pass への第二回の登山を試みた。七月三十日 Schwarzlor (Peaks, Passes, and Glaciers, vol II. i. p. 331, A. J. vol XXI. p. 135 參照。) アルプウベルヨッホの第二の記錄としての通過。八月五日 T. Rennison, W. E. Utterson kelso と共にフィンステラールホルン登山 (Alpina, 1915, p. 115, Studer, 1st edition i, 88; A. J. vol. XXXII. p. 222 參照。) 八月十四日シュレックホルンを案内者クリスチアン並びにペーター●ミケル及びウルリッヒ●カフマン (Ulrich Kaufmann) を伴ひて初登頂した。(此の時の登山の記述はスティーブンの名文として知られたる Ascent of The Schreckhorn ありて、Peaks, Passes, and Glaciers, II. ii 3 に掲載せられ、後 The Playground of the Europe に收められてある。)

一八六二年 モルガンとティトリス及びヨッホ●バス ('Life', 90-91) 七月二十一日スティーブンはハディ (J. S. Hady) ロバート●ライヴィング (Robert Leiving) モルガン (H. A. Morgan) ジョウジ (H. B. George) ムーア (A. W. Moore) の六氏と共に、七人の案内者としてグリンデルワルト氷河で鍛えた精鋭、即ちクリスチアン並びにペーター●ミケル兄弟、

ウルリッヒ・カフマン兄弟、（其の中の三人は一八六一年グロース・シュレックホルンの初登頂を共に行ひたる者）クリスティアン・アルメン（Christian Almen）クリスティアン・ボーレン（Christian Bohren）ペーター・バウマン（Peter Baumann）を伴ひてユンクフラウヨッホ（Jungfraujoch, 3550m）を初通過した。（此の時の登山記は The Jungfrau-Joch と言ふ表題下に誌されて彼れの著『プレイグラウンド』に收められてある。）七月二十一日ハッデイ、ライヴィング、モーガンと共にメンヒヨッホを越えてグリンデルワルトに歸着。前記三名と共に Fiescherjoch の初通過を爲した。（A. J. vol. XXXII. p. 237—8 參照。彼れは此の登山に關してアルパイン・クラブに於て講演した。A. J. vol. I. p. 97 又其の登山記は 'The Viescher-Joch と題ふ一文と成りて『プレイグラウンド』中に收錄せられてある。）八月二日アレッチホルンの第五番目登頂（'Life' p. 91, A. J. vol. XXXII. 235, Jahrbuch S. A. C, 1917, p. 8 參照。）更らに T. Howells と共にワイスホルンの北稜より登山を試みんと出發せしも、案内者の報に依りて同登山を放棄し、八月十三日ティンダルの採りし登路に依りて同峯の第二登頂を爲した。（スティーブンは此の登山に關しては A. J. vol. I. p. 39 に記して居る。）E. S. Kennedy 及び I. Taylor と共にルガノを經てキエサに八月十九日に到り、八月二十日モンテ・デルラ・ディスグラツィヤを登らんと試みて、却つて Pizzo Pioda の初登頂を爲す結果と爲り、八月二十四日に於て始めてベルニナ山群の峻峯モンテ・デルラ・ディスダラツィヤ（Monte della Disrazia, 3,680m.）を當時英國山岳會會頭たりし彼のエドワード・シャーレー・ケネディと共にマイリンゲンの名案内者メルヒオール・アンデルエックと英國人の從僕トマス・コックス（Thomas Cox）を伴ひて初登頂した。（A. J. vol. I. p. 3）

一八六四年　E. C. Grove 並びに R. J. S. Macdonald に共にクラウゼン・パスより Claridenstock を登らんとせしも、此れは成功せずして七月三十一日 Scherjoch (or Kammlücke) の初通過を爲した。ウィンターベルク山脈を越えんとする試みを爲した後、ウィンターリュッケの旅行者としての初通過を爲した。シュトラールエック峠を越してアイガーを登頂し、八月九日ロッタールよりユングフラウの初登頂を爲して、エッギスホルン迄下つた。アレッチホルンに登りて、八月十四日か十五日にはアルプウベルヨッホを越えた事が、ツェルマット村備付の Old Visiters' Book に記されてある。八月十六日 E. Z.

Buxton と共にリスカムを西側より新登路によりて、同峯西頂を初登頂した。(A. J. vol. I. p. 377, XXXII. p. 210 参照。) 八月十七日 Trifjoch を越え、八月二十一日にはグローヴ、マクドナルドと共に Diablons を登り、八月二十二日にはグローヴ (F. C. Grove) と共に案内者メルヒオール及びヤコブ・アンデルエックを伴ひて、ペンニン・アルプスの難峯ツィナール・ロートホルン (Zinal Rothhorn, 4,223m.) を初登頂した。此の登山に關してはスティーブンの記述として "The Rothhorn" (The Playground of the Europe, chap. IV.) がある。Col d'Argentière を越えて、八月三十日モン・ブロンを同じくグローヴ、マクドナルドと共に登つた。(F. Harrison, My Alpine Jubilee, p. 84—5, Alpina, 1915, p. 114 参照。)

一八六五年　此の年スティーブンはアルプスを訪れる事は無く、僅かに記錄として殘るは英國に於けるロック・クライミングにて、彼の Pillar Rock を Slab and Notch r ute に依りて、第三番目登攀を爲した。(Journal of Fell and Rock Climber's Club II. p. 16 參照。)

一八六六年　O. W. Holmes, Jr. と共に七月一日に Balmhorn を登り、Tschingel Pass を其れに續いて越え、七月十二日には Mönchjoch より Mönch に登つた。(A. J. vol. XXXII. p. 231 參照。) 然る後ツェルマットに到り、同地にてホームスに別れた。斯くてスティーブンは七月十七日に Gabelhorn を登り、Weisstor を越えて、七月二十二日 Fletschhorn に登り七月二十九日其の前年冬に婚約せしサッカレー孃と會合せんが爲めツェルマットに歸つた。(Life, pp. 180—2, 186—7, 220, 225, 參照。) 其の後スティーブンは J. Bryce と共に雅府に到り、トランシルヴァニアン・アルプスに登山した。即ち Hermannstadt より Szekely Udvarhely を經て、Borszcek に到りて、八月二十七日 Ciahlaul (或ひは Ciahlau 又は Csulo) に登り、Budösberg を經て Kronstadt 及び Törzburg に到り、九月三日 Bucsecs に登つた。(スティーブンは此の旅行に關してアルパイン・クラブにて講演を爲し、同紀行は 'The Eastern Carpathians' と題されて A. J. vol. III p. 25, 29. に掲載せられ、後『プレイグラウンド』第一版の第四章として收錄せられた。)

一八六七年　主として瑞西 (グリンデルワルト、マルチニイ、ツィーナル、ツェルマット等) に彼れの新婚旅行を爲した

(‘Life’ p. 196—7 参照°) Augstbord-Schwarzhorn に於て有名な瑞西登山者 Melchior Ulrich と會つた。(Jahrbuch, S. A. C. XXIX p. 219 参照°) スティーブンの結婚は彼れをして ‘The Regret of a Mountaineer’ なる一文を成さしむる機會を齎らしたのであつた。(同文はコーンヒル・マガジンの Nov. 1867 に發表せられ、後『プレイグラウンド』の第五章として再錄せられた°) 一八六八年スティーブンはアルプスを訪れなかつた。

一八六九年　此の年スティーブンは始めてイ！スタン・アルプスの登山を爲した。此れは有名な記錄にて、登山史上に於てスティーブンの Historical Dolomites wandering として知られて居るものである°即ち其れは Monte Confinale, Monte Sobretta (alone), Monte Tresers, Königsspitze にして、此れに關しては The Baths of Santa Carina なる題名の散漫なる紀行文 (Fraser’s Magazine, Nov. 1869; ‘Playground’, IV, no. I) がある。其れよりスティーブンは單獨して Cima di Ball の初登頂 (Die Erschliessung der Ostalpen, vol. pp. 422—3 参照°) Cima di Fradusta 及び Passo Pravitali の旅行者としての初登頂並びに初通過 (Die Erschliessung der Ostalpen, vol. III. pp. 424—432 参照°) を爲した。此の登山に關してスティーブンは‘アルパイン・クラブ’にて朗讀講演を爲した。右記文 The Peaks of Primiers は A. J. vol. IV. p. 385 sq. に掲載せられ、後『プレイグラウンド』に一章として收錄せられた。

一八七〇年　此の年は單獨にてアルプスに僅かの時日訪れたのみであつた。即ちグリンデルワルト、メョンヒョッホ、エッギスホルン、エッギスヨッホ（南側より）ツェルマット、ザース、リート等であつた。(‘Life’, p. 218—21 参照°)

此の年スティーブンは山岳風光に對しての十八世紀代に於ける人々の見解と態度を論述せる ‘The Alps in the Last Century’ を書き、一八七〇年八月のフレーザース・マガジンに掲載した。同文は其後 ‘The Old School’ なる題に改めて『プレイグラウンド』の第一章として再錄せられた。而して彼れは同文の終尾に於て後日更らにアルプスに對して其れ以後に於ける近代的な具解鑑賞に就て述べる意のある事を述べて居る。此れを彼れは『プレイグラウンド』の第二章として同著にて始めて發表せる ‘The New School’ に於て實現したのであつた。スティーブンのアルプスに關しての唯一の著書たる ‘The

Playground of Europe' は上掲せる諸文を含みて一八七一年に出版されたのであつた。然し同著はアルパイン・ヂャーナルに於ては新刊批評せられて居らぬ。其れは恐らく其の當時スティーブンが同誌の編輯者で在つたが故であらう。

一八七一年　九月四日にモン・ブロン山群のエギーイユ、モン・マッレ(Mont Mallet, 3,988m.)をウオールロート(Wallroth)カブリエル・ロッペ(Gabriel Loppé)と共にメルヒオール・アンデルエックと他にシャモニイの二案内者を伴ひて初登頂した。そして其他 Mont Fleuri を J. Birkbeck, Jr. と共に一部分登山し、ロッペと共に Col du Tour, Fenêtre de Saleinaz, Col du Chardonnet を越えてモン・ブロン山下を歴遊し、ロッペ、ウォールロートと共にモン・ブロンに登頂した。(Alpina, 1915, p. 12 參照。)(此の登山に關してスティーブンは 'Round Mont Blac' と題してアルパイン・クラブにて朗讀講演を爲した。)

一八七二年　此の年のツェルマット訪問に依りて 'A Bad Five Minutes in the Alps' を書いた。(フレーザス・マガジンの一八七二年十一月號に掲載され、後彼れの著 'Free-Thinking and Plain-Speaking' に再錄せらる) C. E. Mathews と共にピーチホルンに登つた。(A. J. vol. XXII. p. 165 參照。) J. Birkbeck, Jr, と共に Pillar Rock 登攀。(Climber's Club Journal. vol. VIII. p. 3 參照。)

一八七三年　モン・ブロン山群の一つの顯著なる鞍部コル・デ・ジロンデル (Col des Hirondelles, 3,465m) をガブリエル・ロッペ、トマス・スチュワート・ケネディ、ガート・マーシャル (J. A. Garth Marshall) と共に七月十四日案内者マイリングンのヨハン・フィッシャー (Johann Fischer) グリンデルワルトのウルリッヒ・アルマー (Ulrich Almer 有名なクリスチアン・アルマーの第二子) 並びにシャモニイの案内者アンリ・デヴアッスウ (Henri Dévouassoud) を伴ひて初通過を爲した。(此の登山に關してスティーブンはアルパイン・クラブにて 'A New Pass in the Chain of Mont-Blanc' なる題下の朗讀講演を爲した。同文はアルパイン・ジャーナルの vol. VI. p. 351 以下に掲載せられ、其後 'Col des Hirondelles' と改題して『プレイグラウンド』第二版第八章に收錄せられてある。) Aiguille des Charmoz の登山を試みたが成功し無かつた。(A. J. vol. VII. p. 423. X. 399 參照。) 八月六日、ロッペと共にモン・ブロン山頂よりの日沒を眺むる爲めに登頂。(右に對しての印象は有名な 'Sunset on Mont Blanc' にてコーン

ヒル・マグジンの一八七三年十月號に掲載せられ、後『ブレイグラウンド』第二版第十一章として收錄せられた。）Evian-les-Bains より Dent d' Oche の登山を爲した。（右の登山の紀行は一八七四年六月のコーンヒル・マグジンに掲載せられたる 'A Bye-Day in the Alps' である。）

一八七四年　ガブリエル・ロッペと共に Brouillard 氷河に於ける山友達 J. A. Garth Marshall が災禍の現地を親しく訪ねた。（ロッペと彼れ自身及び F. W. Gibbs と共にスティーブンが此の時コル・ドゥ・ヂェアンを越えたのを以て、スティーブンの最後のアルプスに於ける夏の登山と思ひ違ひして居る。）

一八七五年（スティーブンのアルプスに於ける最後の夏）　F. C. 及び J. W. Hartley と共に Nässijoch の恐らく初通過か左も無くば第二通過を爲した。（Climbers' Guides, Bernese Oberland, II. p. 80, studer; Ueber Eis und Schnee, III. p. 431; C. D. Cunningham, A. C., and Sir W. Abney, A. C., Pioneers of the Alps, P. 259; Life of Sir Leslie Stephen, q. 253 參照。）

一八七六年　ガブリエル・ロッペに會ふ可く一月にアルプスに行つた。彼れ等はグリムゼルを越えて、ガーレンシュトックの登山を試みた。此の冬のアルプス訪遊に依りてスティーブンの名文 'The Alps in Winter' は生れた。（コーンヒル・マガジン一八七七年三月號及び後『ブレイグラウンド』第二版第十三章收錄。）

其後爾來八ケ年に亘りてスティーブンは常にロッペと共に一月に於けるアルプス訪遊を繰返した。即ち其後一八七七年に於て彼等は一月十七日より二十六日に亘りて旅行を爲し、一月廿二日にはガーレンシュトックの冬季初登頂を爲した。（L'Echo des Alpes, 1877, p. 68; Neue Alpenpost., V (1877), p. 83; Studer, Ueber Eis und Schnee, I. p. 466; Club Alpino Italiano. Boll, XI p. 163 參照。）而して一八七九年にはティトリスに登り、（'Life of Sir Leslie Stephen', p. 99）又同年一月二十二日にはグリンデルワルトのシュワルツホルンに登つた。（A. J. vol. IX. p. 215; C. A. I. Boll. XIII. p. 259; studer's, 1st edition, iv. p. 39）而して一八八一年には恐らく彼れの最後の大なる登山たる可き Flüera-Schwarzhorn を登つた。（'Life', pp. 87 and 342）其後も尙ほ一八八七年、八八年、八九年、九〇年とそして最後には一八九四年に於ける迄アルプスを訪ふ事は止まなかつたので

あつた。(右に關しては 'Life' の pp. 390, 394, 397, 412, 407 及び A. J. vol. XXIII. p. 494 參照。)

右を以つてスティーブンの永年に亘る登山經歷は悉く記し終る事と爲るのであるが、彼れの登山經歷は既に上述の記錄の示すが如く、一八五九年より一八七三年迄が其の最も活動的な期間であつた。そして其の年數の比較的短きにも拘はらず甚だしく華々しきもので有る事は、他の同時代の英國登山者の其れと比せずしても既に感ぜらるゝ所であらう。

而してスティーブンは彼れ一流の雄麗なスタイルの名文章を以つて、彼れの此れ等の立派な登山に就いて書いた。此の點で彼れは英國に於ける山岳文學の泰斗である。彼れはモン・ブロン山嶺の日沒を描寫する爲めに、殊更ら此の高き山嶺に危險と苦痛とを冒して留まり、そして、彼の名高い名文 'Sunset on Mont Blanc' をものしたのであつた。彼れのアルパイン・ジャーナル、コーンヒル・マグンチン其他に發表した文を集輯せしものが、即ち一世の名著 The Playground of Eurpe である。(註)

【註】同著はスティーブンの登山に關しての唯一の著書にして、一八七一年倫敦の名書肆ロングマンスよりオクターヴォ版として其の初版が出でた。右はスティーブンが其時迄フレザース・マガジン、コーンヒル・マガジン及びアルパイン・ジャーナルに發表掲載せしアルプスに關しての記文を集輯せしものである。其後一八九四年に到りて、スティーブンは更に第一版とは其の內容に於て多少の相異を爲す第二版新版を出版した。(クラウン・オクタアヴォ版) 此の第一版と第二版新版との間には其の內容に於て左の如き取捨が行はれて居る。即ち第一版よりは "Eastern Carpathians" と "Alpine Dangers" この二章を、前章は書名とは關係無きが故に後章は全く陳腐なものと成りしと云ふ理由を以つて省き、其の代りに第一版上梓後誌したるものにて、アルパイン・ジャーナルよりは "Col des Hirondelles" を、コーンヒル・マガジンよりは "Sunset on Monf Blanc" と "The Alps in Winter" の二章を取つて加へる事にした。斯くて第二版はスティーブンの文体を最も好く代表する名文の總べてを含みたるものと成り、第一版より從つて第二版新版の方が尊重せらるゝ事と成つた。第二版新版は其後版を重ね、又廉價版 (silver Library) 米國版も出でて居る。筆者の手にせしもの或ひは見たるものは第二版新版の『オリジナル・エディション以後一九〇九年の書肆 G. P. Putnam's Sons の版迄の總べてであるが、第二版新版の原版は木版押畫多くありて、クラシックの感じ深きものである。此の他に殊に第二版新版冒頭にはスティーブンの永年の山友達でありしガブリエル・ロッペと彼れ自身との間に結ばれし友情の紀念の爲めに、スティーブンのロッペ

宛てに誌せし書翰体の一文がある。其故スティープンの登山文學上の名著 The Playground of Europe の最も代表的な版たる第二版新版の内容は左の章より成つて居る。

Pages

TO M. GABRIEL LOPPE, ... I

Preface V

Chap. I.-The Old School XXXIX

Chap. II.-The New School XXXIX

Chap. III.-Ascent of the Schreckhorn XXII

Chap. IV.-The Rothhorn XXVIII

Chap. V.-The Eiger-Joch XXVIII

Chap. VI.-The Jungfrau-Joch XVIII

Chap. VII.-The Viescher-Joch XXV

Chap. VIII.-The Col des Hirondelles XXVIII

Chap. IX.-The Baths of Santa Catarina XXXIX

Chap. X.-The Peaks of Primiero XXXV

Chap. XI.-Sunset on Mont Blanc XXV

Chap. XII.-The Alps in Winter XXVII

Chap. XIII.-The Regrets of a Mountaineer ..... XD

スティープンの名文家として喧傳せられて居るにも拘はらず彼れには登山に關しての著書としては此の The Playground of the Europe のみしか無きを以て多少詳細に該著に就て誌す事とした。スティープンの文に依つてアルプスは一つの遊樂場と化せりと難詰せる一部大陸の登山者の批評は、不幸にして唯だ此の The Playground of the Europe なる書名の "Playground" なる一語に懸つて居ると言はれて居る。(後出の此れに關する個所參照。)

—— 此稿未了 ——

横尾谷よりみたる南岳　　山縣　浩

丘

―この一編を無音にうちすぎた友どちに捧ぐ―

館　脇　操

いつとはない、はてしない連鎖のひとゝきである。「すべてのもの、私の行先を聞いて下さるな」私の眼が、冷たく輝いた時、不思議とにじみ出るひとりのよろこびと、旅のなつかしみが、いつもリュックサックをもたせた。そしてザイルもないその袋は、トリコニーもない私の靴と直ちに結びついて、いつも私を、丘へ丘へと導いて行つた。私は手招くかげにまつはれつ、この十年に近い日を、丘の日に與へ勝であつた。そして、さすらふ心の瞳を、いつかはつきりと感ずる自分になつてしまつた。

私は多く時間や地形には全く無關係に歩いたことが多い。そしていつも一番終りに近く、靜思と言ふことが殘された。私は始め主觀に沒頭したい氣持を包むで、よく疲れた室を後にしたが、今は、主觀も客觀もない環境に、魂の放牧をさせに、丘にゆく。

自然の中には時といふ牧草が、無限にひろ〳〵と生ひ茂つてゐた。大氣は悟感の透性に、もの自らの光にみちる。私には問もなかつた。答もなかつた。

丘。丘。たましひのまきば。

*　*　*　*　*

郊外

都人士にもなりきれない、さうかと言つて正直に言ふと全く土の子にもなりきれない私には、札幌近郊はこの上ないこのましいもの〻一つであつた。

そこには、幸にも創造的なゆたかな地の香がどこかに殘されて、土の貌がそのまゝの自然を語つてゐる。早春、初夏、晩秋。その頃ほひのふくよかな思を追ふと、やんわりともたれかゝる自分の心が、自分をうつとりさせる。

馬場牧場から三角山の尾根。又盤の澤への峠道。

春は白根菜の咲く谷に、如何に華かなりし豫科の日よ。

殘雪の所々に、むつとむせる樣な黑土の膚、靴をぬいで、その軟き感觸にひたる峠の眞晝、白いイチゲの花に心をやりながら、あの尾根、この峯、かの溪と、幾度、手稻、百松澤、砥石の山々を追つたらふ。

それにも增して深い秋のかけよ。私は三角山の麓、殊に馬場牧場の北のほとりを愛好した。小春日和の陽を一杯にうけながら、遠く增毛の方の山から、又蘆別、夕張の新雪を眺め、狐色にくれた石狩の秋を、唯ひとり枯草の間からみつめてひた〳〵に湧く寂の透徹を、どんなになつかしむだらふ。そして、ひとりのひかりをいとしむだらふ。又、その頃ほひ、シャンツェの所には、よく山へゆくのでも見知りの人達が、臺によりかゝつて、煙草をくゆらしてゐた。すゝきがゆるい傾斜に一杯光る。たばこのけむりが、紫に、いつ崩れるともなく、澄むた空氣の中にとけこむでゆく。私はじつと枯草に身を横へたまゝ、その人達のしづけさを破るのをおそれ、又自身の安靜な平衡が破れるのをおもひ、いつも、はてしらない想影をそのまゝに追つてゐた。雲がゆるぐ。ひとすぢの雲がゆるぐ。

こゝろがふかむ。

大地への生活。いつかはそれにかへりゆく旅人であらふ。人生に最小極限を求め、許された自然に最大極限を求むる者

に、この丘の晩秋。靜閑にたゆたふ自由なる憩は、安息のゆとりを與へた。

「時に韻あれ。」

私は殊に秋の日の丘のひとゝき、めつむりつ、そのひとことのかげに、ひとりしづむでゆく。

千尺高地

多睡。懈怠。

千尺高地の初夏は華かに微笑してゐる。

さあ、友達。

ゆつくり煙草をくゆらしたら、うんと大きくのびて、ゆたかなる眠りをむさぼらうぢやないか。

涙には白根葵が咲いてゐる。森には黒百合が咲かうとしてゐる。

初閑古鳥を聞いたのは昨日。

白樺によりそひきたる微風のさゆらぎを、一つのこらず吸いこんで、魂の散索者としやれこまふ。

錯覺の夢遊病者の群から放たれて、今こそ、新鮮な綠の上で、自由に踊れ。

さあ、山々のライン。かこみ、かこむで、この俺と友達のために、豪奢な圓舞場をつくつて下さい。

空は虹の輪にめぐりだす。でも大洋の樣な碧さが、稜なされてゐる。

二つの魂は、鳶色の帆をはつて走る。

客觀と主觀の座標軸の交點に、時がすばらしい、旋回をはじめたのだ。

明日の日をおもはざる群。

昨日の日をわすれし群。

大地の底のぬくみ。大空の奥のひかり。
白金の霧につゝまれきたる世界のときめき。
輝しきなまけよ。
輝しきねむりよ。
純なる野性のこのよろこばしき息づきよ。
魂は眠る。
されど躍る。
初夏の太陽はうまい。

砂丘

「幸福なんて、幻の一片さ」事もなげに言ひ放つた丑の横顔が、十四日の月に、はつきりと浮むだ。海の聲を砂丘越に聞きつ、、鏡函の砂丘のかげに、仲秋の夜を、ぽつり〳〵と話してゐた。

こゝのすばらしい秋。柏の林が全く褐色になつた頃、砂丘の芝草に印された轍の趾は、いつでもすなほに私の心を呼むでくれる。そして、また忘れ難いこの潮鳴り。暗さを日毎に増す海の面にみいつては、虚空無邊の推理が、水底から、ひた〳〵に迫るのをおぼえさせられる。

南歐の香よりも、むしろ北極圏のくらさをおもふと言ふ。スカンディナビヤ、又、ベーリング。南の情熱よりも、北の憂鬱を追ふと言ふ。私達は互の心にかられて、肩をくむだまゝ、渚を歩きまはつた。

むつつりと頭をあげた砂丘は、月光を歩みた水の面に默念と向つてゐる。帆船一つ無い中に、海は歌ひつゞける。一定の調律の中に、不思議とせまる力がひそむ。描き出さるゝ心想の影に、私達はだまつたまゝ、渚を歩みつゞけた。

又忘れ難い小春日もある。

それは時雨の來さうなひるさがりであつた。集ふ三人の友は、みんな別々にこの砂丘の一隅に座した。そしてだまつてこの午後も海をみつめた。いつ終るともない想が、この時も、後から後からと湧いた。丁度一線の雲の流れから、ひろごりゆくかの動きの樣に。さだめない時雨が、ワウスの頂の方から、沖にかけてやつてくる。その度にたまらなくなると、みんなで期せずして磯舟の中の苫の中に逃げこんだ。

「乞食の風流」は、奇しくも、いつも私の血管にめぐつてゐる。そして樽で生活したギリシアの哲人をおもつては、その風流がニッタリ笑つてゐる。一相三味の境地を思ふと、たまらなくその雅致が戀しくなる。闇の力に蠢めく、太陽の力を知つてゐやうか。

「乞食の風流」私はたまらなくなつて、ひとりごとを言つた。三人はクスリとしたまゝ、その言葉を沈默の中に、うけいれてくれた。貧しいパンをひらいて、海の聲に聞き入りつ、眼は、石狩につゞくほそやかなる砂丘の逕を追ふ。

時雨は又晴れた。舳から砂濱に飛び下りて、ふり仰げば、手稻の溪には新しく雪が入つて、地平線には柏林が大きく線をくつきり浮かせてゐた。

峠

海のかなたに、黑い雲の一群が動き初めやうとする頃、幾つかの日和が、私達に許される。山ヅレのした人達が、夏山と冬山の息つぎに、丘歩きとシャレる頃、この錢函の峠のあたり、リュックサックを輕げに脊負ふ人達をよくみうける。

桐の林から海を見下す十万坪に、友の幾人かは、半年は住みたい所だと言つてゐた。とりいれに忙しい村人に、陽がゆるやかにさし、みちすがら落葉の音にひかれ勝に、氣分主義の歩みをつゞける時、どんなにか、まとまつたこゝらの雰圍氣が私をとらへるのだらう。

峠へ。驛から、三時間もたてば、いくらゆつくりしても、その頂には着ける。その頂は、低いネマガリで、余市、朝里白井、天狗と、石狩から後志との境をなす山々を眺めるには、又とない所である。溪の幾つかに既に銀線も入り、秋も冬のけじめを味ふには、二つとない適しい所である。

私は峠にひかれては、よくこの鞍部に座つた。越しかたの紅葉せる山の色を、心によみせながら、こゝらわたりの山容にひたつて、更に、おごそかなる、針葉樹の森、山ぶところ深くたづねいれば、私のたづぬる所は、ひろやかにそこからも又もひらかれてゆくのであつた。無我の觀智を、自然にたづね得た人達に、言ふを得ざるなつかしみおぼえるも亦この時である。

幸福以外の幸福をたづねて、久しい彼であつたが、そこに幸福も不幸もないのを知つた瞬間、彼は思はず苦笑せざるを得なかつた。そうかと言つて、今更に無暗に幸福を追ふ氣持にもなれなかつたし、眼茶に自分を不幸におとす感傷も持てなかつた。坦々砥の如き一筋の道が、彼の眼前に永くつゞいてゐる。

山にみいれ。地の奥からひゞいてくる聲が、深くにじんでゐる。心よ。こゝに自らを知る明をうがて。智より明の世界に。外角の境より内角の境に、はたらきがしづまらうとしてゐる。輪廻より輪廻の波動の泡沫が、混沌の一氣にふれて、ほのかなるよろこびにみつるのも、この折である。

さゝやかなるひるげの後に、私は、ひたすらなる眠をむさぼつた。眠は深く、夢なき眠は幾ときかをつゞく。山こめてかそけき音すらもない。

この日頃のこの道のかへりすがらに眺むる石狩の海。鈍色好みの秋は、全くの寂感にしづむで、私達に名殘を惜しませ遠く增毛の山々が、夕暮をかげりそめしめて、その日のおもひを、色むでしまふ。十万坪を通りぬけて再び錢函へ。海は變りなくうたふであらふ。そしてどの人へもどの人もの心を送るであらふ。

野幌

大地の沈默と幻想は、森林に培はれる。

懷疑的な宇宙觀から出發して、山に思索し、森に冥想せる彼等の念想は、否定の根本から出發して、肯定の哲理を系純的に說き終つた。印度に胚胎し、東洋幾千年の文化ににじみこむだ深き流れは、山に思ひ、森にその源を發してゐる。

石狩平原のかたまりは、その南に、なだらかな台地をのべて、こゝに野幌の林は展開されてゐる。針葉樹は端正な姿をとゝのへ、濶葉樹と混じて、春の日に、初夏の日に、又秋の日に私を誘ひ、我が抱く土の故鄕への言葉を、よく私に傳へてくれた。

春の陽は雪解のあとに、福壽草が咲く。いのちのよろこびに觸れる森のひとり歩きは、全くの孤獨から離れて、時の歩みによりさう生き行くいぶきを、正しく一つ一つ味ふて行つた。小石にも拾ひ得た軟かな情操を通して、森にさゆらぐ生命の波動。たく〳〵とうつかすかなひゞきが、自らの脈膊の回律と知り、しかもその回律が、かの波動に全くの合一をみる時、私にはひかりのいのちが、こよなく蘇つてくる。

山鳩啼く日。

私が翠（みどり）といふ貌を、初めて知つたのは、幾年か前のその日の森である。と共に翠を越しての空の蒼さといふなつかしみを知つたのも亦、その日頃の森であつた。「初夏の森林は、いくらしづかでも、にぎやかですね」と言はれた新島先生の言葉も、私の耳には强く印されてゐる。山鳩啼くまひる、針葉樹の森ゆく心を、私はこよなくいとほしむ。深い木蔭にのみ許される蘭が咲く。忘れられるものはない。祈りにつゝまれ、うつゝは祈りをうたひ、にぎやかな靜處はこゝにのみひろごる。

落葉をわける音を知つてゐますか。

そう聞いた時、默つて笑ふ友達の幾人かをもつた私は、その幾人かの友達と、又よく秋の日、こゝに遊むだ。寂靜に座して、眞理の精進を追ひしそのかみの人達に、この落葉如何ありしや。森は全く落ちついて、じつと日に迫る恢暝の空を待つ。夕つかた樹間に、やまぶどうをあつめながら、その實を味ひつ、音もない林地に、自らをたづねゆく。止みがたい流轉の中の止觀こそ、晩秋の野幌の、私に告げてくれる最も好い言葉ではあるまいか。

忍路兜岩から

來りて行く旅とは知るに、今この入江をみてゐると、どうしてこみあげてくる何者かゞあるのでせうか。いつしかに旅はてなむ。けれども、それは、また次への旅と私を呼ぶのでせう。

きのふ夜もすがらに荒れ狂ふた海は、今日は稀ななぎで、冬には珍しい日です。

愚かで氣が小さく、全くの人生人になりきれない私も、こうして忍路あたりの岩の上に座し、ゆつたりしてゐると、自然と頭のさがる人生人になるのを感じます。dreamer、幾人かの人が私を呼びかけます。私はでも、正直の所、私の環境が許してくれる間は、その名前を、うけいれたく思ひます。

その昔、といつても、五十年もたゝぬ頃には、こゝに幾多の彩られた海の男達の物語りがあるのです。何百石積と稱へられた舟が、十二艘もこゝにかゝつた時、どんなにか人々は華々しい心を抱いたでせう。横柄な役人衆や、無智な漁夫達や、そして二八庫や、時代劇が私にくゝられて行く時、私は無關心に、入江や岩を見ることが出きなくなるのです。

人間が智慧の實をたべてから、人間の宿命は、一層混亂してきた樣です。地が文化に立体化すると、人間の生活はラビリンスの中を廻りはじめるのです。

私は旅に居て、旅人として、時といふものにじいつとみいるのが、とてもに好きです。私は自らの好む性のまゝにかく今も、眞晝の入江にひとり對してゐます。

カールセン氏の飛躍振り

人爲と無關係に、自然は自然で働いてゐます。眼に見えない調和が、でも、そこに働いて、まあ、何とスムースに時が動いてゐるのでせう。空間の、存在のたえまない凸凹にくらべて、私には、無限を連續的に行く時が、ひたなつかしまれす。

北の國には稀な青空の中を、白い雲が流れて行きます。

海面には鷗が唯一羽、動かうともしません。

寫眞說明

「テイネパラダイスヒュッテ」　つい數年前までは相當の決心と準備とに心を躍らして登つた手稻山もこの冬は多い日は一日に五百名のスキー家を迎へる樣になり、又頂上より錢函まで廿一分なしがしにて滑走したと云ふレコードさへ作られた。寫眞は朗らかな冬のある日のヒュッテの賑かぶりである。

「横尾谷より南岳を望む」　今春三月下旬横尾岩小屋附近より撮影せるもの左方は屏風岩の基部である

「カルルセンの飛躍振り」　近頃は氏の空中のフォームが變つたとやかましく云はれて居る。寫眞は在獨中の木原氏より送られたるもの。シャンツエはクロステルの Selfrangar-Schanze である。

—健生—

夏スキーと其の利用

ゲオルグ・ビルゲリー
廣田戸七郎抄譯

夏期に於てスキーを利用することについては多くの反對があらう。スキー滑走は冬季に屬するものであると彼反對者は云ふ。成る程、スキーはウンタアスポーツの一種であるから此意向も正しい樣である。されど此處に問題となるべきことは凡そ冬といふものが何時から何時に終始するものであるかといふことである。決して冬は凡べての對象に一樣の時期にはない。此處中歐では數ヶ月からの相違を見實に吾々のアルペンのグレッチァ地方では恒久の冬を持つことを冷靜に立ち反つて論斷することが出來るのである。そして地上に雪と氷の覆のある間は冬の規準を示すに足るものである。而して此規準こそスキーランナァには季節の唯一の規準となるものである。天文氣象學的の冬の意にあらずして、季節としてスキーの利用の問題を考へることは吾々にとつて重大な意義を有するものであり、しかも——私は夫れをかく名づけたい——「旅行の冬」とそしてそれは雪の存在する處何處にも通用するものである。

私は直ちに純スポート的の見解から離れてスキー滑走といふものを旅行的の價値から夏期の季節に於てのスキーの必要（所謂夏スキー）のことにのみ關して述べたいと思ふそしてその季節では夏スキーは少くとも冬スキーの如く特にスキーを穿くアルピニストには大きな役を演ずるものであらう。

夏スキーの名は單に夏期に於てのみ必要とせらるるに過ぎぬと云ふ樣なことを吾々に信ぜしめぬであらう。スキーランナァが雪に緣遠くなつた自分のスキーを擔いで暫くの間谿谷に入らねばならない樣な時、夏スキーは有効なもの

であり、そして三月の末、又は四月などでは無論たしかに有効である。ではあるがその有効なることは春季のみに止らず夏期に於ても亦効用を示すものであり、しかも雪の狀態によつては到る處歩いて歸るよりもより速かに旅する者を運んでくれる。これは四季を通じて氷河地帶（グレツチアゲビート）に見らるることである。そして尙此夏スキーは、氷河を涉り歩く人々に時間の節約以外に愉快なる競技的享樂をも與ふるものであり、而も亦氷河の罅隙（スパルテ）を涉る時にもより確實である。

春季乃至は夏期に於ての旅行には吾々は、多くの場合道案内の積雪帶を求めて或は小川の盆地を齒涉りに、又は雪崩の導條（スパーオセ）を傳ふて遙かなる谷間にたどり行く時、たとへ兩側の斜面々々の牧場が綠に色彩らるゝとも、スキーは暫時ではあるが、必要とせらるゝことが少くないであらう。

たとへ數年來之等のスポート滑走に一つの規準となり、又最もふさわしいスキーのお手本が現はれて來た（テレマークスキー術の意ならん）とは云へ、このお手本問題を完決すべきことには吾々は未だなか〳〵に疑念とする點があるであらう。即ち反對に未だ〳〵それがスキーのスポート的或は使命的の利用目的かによつて生ずるものであるとすれば未だそこに多くの事柄が生れる樣に、この組合せには未だ〳〵多くの新なる事柄が先に加へらるゝであらう。

現在吾々はスキーの多くの使途を持つて居る。そしてそれは常にスキーの本質に一致して相異る問題を條件附けるものである。一つのスキーモデルが一般的の型を與ふるに足らぬものであることがそれから歸納せらるゝことになる。

今日私は種々の長さのスキーを必要として居る。そして利用の方法によつて、即ち地上乃至は雪質狀態に相應して一米から二米三〇糎までの種々の長さのものを必要として居る。

誤解を招かぬ爲に私は、スキーの長さに關しての自分のスタンドポイントを述べて置きたいと思ふ。此處で云ふところは吾々が達し得る高度の絕對的海面標高をさす譯ではなく、むしろ自然的に敢行し得べき曠野の狀態に相應して適宜に使用するの意である。夫れ故スキーランナアの行程に於ても軍隊で使用する場合の如く、スキー滑走に好適の斜面を棄てたり又は反對に障碍物に打克つてスキー滑走の場所を搜し求むる樣な旅行をも含めて居るのである。

旅行が夏期に近づく程、或はスキーを長い間擔いだり、

時々はスキーを擔いで攀ぢ登らねばならないとか、或は全くスキーを締めくゝつて登らねばならぬといふ樣な場合に於ては、スキーは可及的輕く、短くする必要がある。スキーの長さは一米までは制限することが出來る。この型を私は夏スキーと呼び、そして之を積雪圏内に於ける已に述べ來れる春乃至は夏旅行に利用するのである。

この種類のスキーの形については已に準備品の節で述べて置いた。

不斷の滑走の爲に吾々はこの短いスキーを用ひる時にはその巾を五ー六糎にし三粍位の深さの溝を堀り、同時に同じ巾だけとつて溝の線を作る。斯樣にして十分なる滑走が出來ることになる。

次にバインディングはたとへ二つの要素が反對的の意義に於て此影響を受けるとは云へ容易にこの問題は氷解されるゝものであらう。長さが短いといふこと又はそのために非常に自由に操縱し得るといふことゝは、より弱いそして輕いバインディングでも宜しいが、非常な巾の廣いといふことによつて生じて來る困難なる角付は是と反對にスキーに強く足を結びつける締具を望むことになる。が然しその爲に足の運動を爪先で妨げてはいけない。

締具は足の先端がスキーの中央に置かるゝ樣に取りつけられねばならぬ。

Harsch Eisen の使用に關しては長いスキーに用ふる場合と全く同等の價値がある。たゞ之を短いスキーに特に夏旅行に於て用ふることは一層重大なことで、むしろ必要に迫つて使用すべきであると述べられて居るにすぎぬ。然し、Harsch Eisen のみに限らずしばゝ多少道案内をなして居る Firn Schnee の場合にもそれ故用ひらるゝし又特に登行に當つては樂である。何となれば巾の廣いスキーは角付が旨く行かず、又急傾斜面では容易に滑走が出來る。

ストックについては私は複杖を欠くべからざるものであるといふ見解を持つて居る。複杖は本當に旅行的のスキー滑走には多くの効用を示すものである。私は單杖の代りに亦一挺の氷斧(アイスピッケル)の代りに一組の複杖ー氷斧を使用する。

夏スキーの滑走のテクニックは殆んど全く長いスキーのテクニックと同樣である。たゞ概して非常にそのテクニックが容易であるといふ點が異るのみである。即ち短いスキーだけに比較的操縱が樂である。

指導方法は長いスキーの方法の如くした方が良いとお勸めする。特にクリスチアニアを組合すとよろしい。

このクリスチアニアの組合せは夏の Firn Schnee に於て大抵の場合應用せらるゝそして極く僅かの腰の運動で出來るから容易なる、即ち簡單なテクニックを望む譯である。これと同樣の基礎から簡單な横轉滑走もするし、亦このスウィングの豫備練習として多くのスウィングも用ひられる

私は次に樣々の練習に當つて特に研究さるゝところの吾々の長いスキーの一般テクニックに關する數々の効用と差異とについて簡單に述べて見たいと思ふ。

方向變換は無論短いスキーでは非常に容易であり常に山向きで行ふことが出來る。夫れ故それは旅行では無駄な力と時間の空費がないことを示すものである。

平地滑走は多少スキーの緣の外に出て居る足が、前進する際に前出されんとするスキーの後端に突き當らぬ樣に、早足でされる。

魚骨登行も亦スキーの短いといふことによつて非常に容易であり又樂である。

制動滑降は長いスキーと全く同樣である。即ち半制動の姿勢では滑走する方のスキーの尖端は、短い爲に少しも制動スキーに倚り掛けられない。

若しも夏スキーでテレマークが出來得るとすれば、それは單に僅かの滑降姿勢（テレマーク姿勢）をとらるに過ぎぬ。それは後方にあるスキーの尖端が前脚の足の部分に前出されず前脚スキーの後部が他方のスキーにクロッスして、大抵それは轉倒に終る。此處に於て内側のスウィングスキーがその尖端のところで他方のスキーに倚り掛けられそして前出されてある足にもたれることを嚴密に注意すべきである。そして前出する足を餘り出し過ぎぬやうに注意する。

兩膝を可成り強く屈し、後脚の脚を出來るだけ前方にある足に近く引寄せる。

非常に曲げ易い短い夏スキーと多くの場合それと關係の深い幾分濕氣の又時々はガサ〳〵の Firn Schnee には、非常に容易なスウィングテクニックと考へられて居る。多くの場合、スキーを一方から他方に變へる爲に体の廻轉が必要とせられて居る。そして一つのスウィングが完成せられる。

吾々は短いスキーによつて、又比較的容易なスウィングの方法で此夏スキーを使用して、細帶や舌狀に又は口唇の如き形をなす殘雪の上を、細い森の道々と云はず狹溢な溝々乃至は盆地を涉つて安全により速かに滑走さるるのである。非常に細い纖狀の雪面が急にスキの長さよりも巾廣くなるやうな時には此方法のスウィングを必要とする。

雪質の變化極りないところ、又は波狀の丘陵などを滑走する時には、安定を保つ爲に長いスキーを使用する時よりは、比較的一方のスキーを前出される。

丘の波狀面や、溝などのところではしば〳〵むしろ都合が宜しい。といふのは前方にあるスキーを出來るだけ先へ進めて、そしてそのスキー中央部をスキーの尖端の前に位置し、そして出來るだけスキー底面を大にすることが出來る。（譯者。跪坐姿勢の意味ならん）この下降姿勢に於ては一本のスプールであるといふ危險がある。即ち後方のスキーがその前半部で他のスキーの上に乘り、そしてその尖端で前方に置かれてある足の踝に突き當ることになる。若しも非常に安定を欠いても必要に當つては此滑降姿勢をとることが出來る。そして實際的の利用にも非常に樂である。

勿論、一般の登山規則を多少變更して、夏スキーを使用して高い山々への旅行をすることも價値あることである。

夏スキー旅行で雪崩の危險に遭遇することは、冬スキーの旅行の際よりはむしろ少い位である。そして雪崩は多くの場合たゞ新雪の降る時にのみ極く稀に起るものである。

其理由は、新に降つた雪は古い濕潤な雪に大抵都合よく附着するものであるから。

冬にしば〳〵雪崩の危險を引き起し易い傾斜面が夏には安全に通れる。即ち吾々が別に特別な注意を拂ふ必要もないのである。尙其上春又は夏の雪崩は冬のスキーの時よりも時刻的に乃至は場所的に遙かに安全に判斷し得らるるのである。

夏スキーを穿いて氷河を涉る時には、歩いて涉る時と反對にザイルを有力に制限して使用することが出來る。

氷河の徑（みち）はその披裂のために又は推積して懸る雪屋根のために大方盆狀の面をなして居る。吾々は氷河の罅裂や披裂を無論出來るだけ愼重にして避けねばならぬ。

然し小さい披裂は通過せねばならない、そして凹める形（盆）の最も狹いところを探しザイルを用ひて有効に涉る

のである。特に披裂の上縁を渉る時には注意すべきであるそこは披裂が少くとも脆いものであるから。

罅隙は可及的直角に、そして一方のスキーを一層前方に進めて通過されねばならない。かくして長くされたるスキー底面も及び比較的大なる滑走速度は披裂を幾分招くものである。轉倒は無條件に避けられない！

披裂によつて作られて居る、時々は狹溢な雪の小徑や、溝の上ではその豊かなる操縦の爲に比較的安全であり又長いスキーに比して前進される。吾々は無論ゼラックス狀をなす氷河の披裂では多くの場合樂にスキーをはづすことが出來る。

それ故に吾々は事情が許し、しかも何等苦痛を感ずることなく取り代へらるる間は長いスキーを使用する。

然し恰も周圍の事情が要求する樣に、そして苦痛を感ずる樣になれば、吾々は短いスキーに代へる。夏が一層近づいて來れば來る程スキーは一般に短くされねばならぬ。特に夏の旅行の際に若しも最も短いスキーが最も適當であるとせらるるならば、方策として是を利用する。

若しも更に短いスキーの滑走の競技的享樂について述ぶるならば、私は人々がしば〳〵遭遇し、繰返しそして言ふて居るところの「短いスキーを用ひてのスキー滑走は少しもスポート的でない」といふ見解を誤れるものであらうと思ふ。

如何にも短いスキーを用ひて扁平な變化のない曠野を緩々と滑り歩くといふのであれば私も亦これを非スポート的であると云ふが、然し亦若しも變化の多い曠野を長いスキーを用ひては多くの障碍の爲に操縦し難い時には、短いスキーを必要とする。そして如何にも愉快な滑走で、スウィングを連續的に行ふて、障碍物を滑り廻る時にはたしかにスポート的である。

夫れ故吾々は計測器を衝てる譯にも行かず又スポートの概念をセンチメータアで測る譯にも行かない。

私は夏スキーの非常な讃美者でありたいと思ふものである。夫れ故此夏スキーの恩惠によるところの愉快なる旅行を心から感謝し、そして前に立ち返りたいと思ふ。

私は自分の滿足を冬のスキー滑走に持つばかりでなく、何時までも谷々から街々が再び眞白な冬衣をまとふまでも此愉快なるスポートの本當の享樂を望む。

夏スキー（Sommerski）に就て

山口健兒

暖い太陽がのどかに輝き出して最早山麓の雪をすつかり溶かしてしまひ、蒼穹にのみ雪白き山々を殘す樣になつた頃は一冬の樂しかつたスキーの旅は日記帳にのみ思出を殘して消えてゆく。

そして再び夏の山旅が頭に上るまでの四月上旬頃より、六月上旬頃まで我々はあの樂しい夏スキーに依る登山を思ひ描くのである。

私はいつも五月の快晴の下の夏スキーの山旅をこの上なくなつかしみ、好んでこれを試みてゐる。故にこれについて淺薄ながら私見を述べて見たいと思ふ。

私はこの夏スキー（Sommerski）を雪上滑走愉樂の道具としてではなくこれを例へばザイルやシュタイグアイゼンの如く一つの登山具として考へたい。何となれば夏スキーなるものは登山にのみ意義あるものにして興味を第一義とするものではないと考へるからである。

我々がこの夏スキーを用ふる時期はまづ前述の如く四月上旬あたりの緊つてザラメ雪になつて來るあたりから、次第に山麓の雪がとけ、山の南側もとけ出してくる五月から六月初旬へかけてである。それ以後に於ては雪量が少くなる關係上さして必要をも感じないのである。然らば夏スキー（Sommerski）なる語は甚だ不適當であるが歐洲地方にては夏季に於て氷河、氷海（Firn）等に用ふるに依るのであらうと思ふ。書物によりてはこれを短スキー（Kurzski）と書いてあるのも見ることがある。

即ち我國に於て輪カンヂキによる登山が最も効果を示してゐた時期が夏スキーに最も効果ある時期であらうと思ふ

（冬期に於ては輪カンヂキを用ふるも膝或は腰までも沒するが、春期に於てはこれらの困難なく歩行の自由を得られ然も輪カンヂキなかりせば尙膝、或は腰を沒する。この時期を云ふ）換言せば融雪の時期が最も効果があるのである。又所謂夏雪の狀態即ち雪が堅くしまつて居り、表面が波狀を呈してゐる際に於ても、若し雪が多量に存するなれば滑降の場合、勞力的にも時間的にもその効果あることは分明であるが、かゝる堅き雪の場合の夏スキーの登行は勞力的にも時間的にも不經濟を免れない。殊に斜面の急傾斜の場合は一層である。

我々にとつて最早長いスキーに依る登山の時期ではなくて輪カンヂキにより登山を計劃する時期が即ち夏スキーの効用時期なのである。

換言すれば我々は輪カンヂキの代りに、夏スキーを以てこれにあてるのである。故に即ち夏スキーは輪カンジキの代用物と見て差支えない。如何にして代用物として用ふるかと云へば、勿論夏スキーの方が利益が多いからである。併しながら輪カンヂキに比べて不利益な點を擧ぐれば

一、形狀の大なること

二、重いこと。

三、技術習得の必要あること。

即ち一、二、の理由は携帶に不便なる結果を來し、三の理由は萬人向きでないと云ふ結果を招來するのだ。

夏スキーの形狀に就て

形狀に先ちてまづ用材について述べる。夏スキーの期間に於ける雪は概して濕氣を含んでゐるので往々にしてズブ濡れになるものである。故に容易に吸水せぬものを選ばなければならぬ。この點からはイタヤ材よりもアカカバ、アサダ又はサクラ材等の方が良好であらうと思ふ。イタヤ材にても質の緻密なるものなればよいと思ふ。又油浸し、樹脂浸し、漆浸し等加工せるものなれば一層よいと思はれる。又柾目より板目の方が數段良いことは周知の事實である。

先づスキー木部の長さの問題であるが、これは長すぎては携帶に不便な條件を遺憾なく備へてしまふし、短かすぎては技術方面の不安定、その他スキーとしての効果が消失するおそれがある。重量は可及的輕い方がよいと思ふ。

G. Bilgeri 氏は雪により最短一米位と云つて居り、Erwin

Hoferer 氏の Winterliches Bergsteigen Alpine Schilauftechnik なる書物中には一一五糎位のものであると記してある。又 Zurich の H. Staub & Cie のカタログには一三〇糎、一四糎、一五〇糎、一六〇糎の四種が載つてゐる。即ち全体に於て最短三尺三寸より最長五尺二寸八分である。

我々の經驗ではまづ三尺五寸位より四尺五寸位までが適當であらうと思つてゐる。我々に丁度よい處は四尺或は四尺五寸であらうと思ふ。

夏スキーの幅は普通のスキーより、幾分廣いものゝ方がよいと思ふ。何となれば廣ければ狹いのより雪面に接する面が廣い(長さは同じであるとして)と云ふことになるので上に同じ力が働いた場合雪面に沒入する力は廣い幅の方が狹い幅のものより少いことになる。

先部、中央部、尾部各部分の幅も矢張り長いスキーと同樣の比でゆくべきであらうと思ふが、スイス製の夏スキーにて中央部より先部の方が狹いのを見たことがある。

次に底面の溝であるが、これはスキーの前進運動の際その前進の方向を變ぜしめぬ事、即ちスキーが勝手に横に轉ずることを防ぐに與つて力あるものであるから、夏スキーの如き輕きためと、短きために生ずる不時の方向變轉を防ぐには溝は二本彫り止むのがよいと思ふ。

締具については、我々は皆殆どフィットフェルト式即ちノルウエー式締具を用ひてゐる。これは夏スキーそれ一個に對して新たなる締具を購入せずに、冬季使用せるスキーの締具を轉用する關係上でもあり、又他に適當な締具が見當らぬ爲でもあつた。

故に我々はノルウエー式締具を使用しつゝあるのであるが、これはあまりよいとは言へない。

何となれば我々は冬のスキー登山に於てさへ屢々これを經驗するのであるが、比較的急勾配の斜面の登行の際に於ける角附け(Kanten)に於て、この締具のスキー木部に通してある前革の爲に、十分なる角附けが出來ずスキーをずらしてしまふ場合が往々多い。(この場合は雪質が問題であるが可成堅い雪、又は堅い雪の表層に新雪が少しくつもれる場合は殊に甚しい。)

このことはちよつとした事ではあるが、考へ方に依つては中々重大な事であらうと思ふ。

かゝる場合を防止する目的に於て、ハルストアイゼン

(Harsleisen)を用ふるのもよいが、ノルウエー式締具を用ひずに、マリウスビンドウング(Mariusbindung)を用ひた方が少し重いけれどよいと思ふ。

次にはトアイアンの附け場所であるが、これは冬のスキーの法式に從つてつけたならば失敗である。何となれば冬のスキーの樣式に從へばトウアイアンより後方の部分の方が前方より短いのであるからゾンメルミーの如き短きスキーにては靴をつけたときその後方の部分は僅かの長さとなつてしまふ。

冬のスキーにて我々が經驗する如くティルの長いスキー程スウイングには困難を感ずるが、滑降には甚だ安定なものである。故に夏スキーの場合に戻つて云へば、その樣に短いティルにては滑降の際の安定は全然求められなくなつてしまふ。故に我々の經驗上これはスキー木部の中央よりも稍々前方に附けた方がよい。大体前と後の割合が前四、後六位でもよい樣に思はれる。

これらの理由から從つて、スキー木部を作る際にはその最も厚き部分をその中央部より前方に作る樣にしなければならない。故にスキー木部の底面の反りは略々中央部附近に於て最高部が來ることゝなる。

我々はこの夏スキーのトアイアンに合せるのにリンク、クリンケルの登山靴を以てしてゐる。これは靴の底面の鋲のためにスキー木部を傷けると云ふ欠點はあるが、春季の登山に於ては常に前途に雪ばかりを期待することは出來ない。或は露出の土の上を、嵯峨たる岩石を、或は根曲り笹ハヒマツの藪などを處さなければならない。

然らざる場合に於ても硬い雪にて、無數の波狀痕を有する雪面などの登行の場合、夏スキーを用ひて登るよりも脱いで歩いた方が勞力的、時間的に早いと云ふ狀態に遭遇することが屢々ある。そしてまた我々には登山なるものが第一義であつて、夏スキーはザイル、クランポン同樣登山なる目的のために伴ふ道具なのである。この點から考へても登山靴に着く樣にするのが至當であらうと思ふし、事實色々の場合その方が便利であり、より有意義であつた場合を多く經驗してゐる。

ストックに就いて云へば、我々は時々ピッケルにリンクをつけたのを用ふる。これで十分ではあるが萬一の場合をやはり考へなければならない。一寸とした轉倒でもハヅミ

があるから負傷をしないとも限らない。故に最善の法とは云ひにくい。併しながら滑降の際杖による制動を成す場合は竹や、細い木とは違つて強さがあるので、實に氣持のよいステムボーゲンや、L.S.T.の滑降を續けることが出來る。

又複杖として用ひてゐるものゝ一本だけを使用するのもよい。併し重い荷のあるときなどは矢張り二本欲しくなる。一本なれば、ステムボーゲンなどの際は甚だ都合のよい結果ともなる。登行の際は丁度塡國式スキー術に於ける單杖の如く、兩手にて横に持ち山側をつきながら登るのである。

これで夏スキーに就いての、形狀用具の一般を極く簡略ではあるが述べたつもりである。

尙此の他夏スキーに就いての餘話に入るが、夏スキーの技術は冬の長いスキーに比べると珍しく易しいのである。故に始めてスキーを履く人で、夏スキーでスウイングが出來たから長いスキーでも出來るだらうと考へて、次の冬長いスキーを履いて見て思はず嘆聲をもらす人がよくある。それ程樂であるので木部が少々位狂つてゐても、殆んど大勢には影響しない樣である。冬のスキーではこんなことは全然駄目であるが、我々の仲間で少々位でなく、大分狂つてゐるのを平氣で履いてゐる者もゐるが、さして苦にもならぬらしい。

夏スキーは又冬のスキー程よく手入れをしておかず忘け勝ちなものだ。それで木部の先のベンドが特にのびてしまふ。夏スキーは長さが短いので、この樣なベンドであると滑降の際よく雪につき立てゝしまふ。よく注意すべきだ。

又短いスキーであるために平地の歩行の際など、トアイアンから先が短いので、よく右足が左足の左へ出たり、左足が右足の右へ出たりして困ることがある。

又雪の斑消えの所などで、次の雪へ移るによく夏スキーを履いた儘草原を越したり、砂礫の上を歩いたり、ブツシユをこねたりする。甚だしい時には岩石疊々たる上をかまわず歩いたり、ハヒマツの上をフワ〳〵渡つたりしなければならないこともある。

夏スキーは樂に持運べるために冬のスキーの樣にスキーデポットなどの必要はない。擔いでドン〳〵前進出來るから時間などは大層助かる。

又夏スキーに於ても冬のスキーの如く、雪質により塗蠟の必要を生ずるが、これはパラフィン蠟で十分である。

併しザラメ雪の場合が春に於て最も多いので、あまり長持ちはせず、すぐに剝脱してしまふ。故にもう少々贅澤を云ふならば、特にスキー用蠟（Skiwachs）として出來てゐるものゝ内で粘り氣の強いのを選ぶべきである。

又シュタイグワックス（Steigwachs）などはその必要を認めないし、又これをつけても効用はない。鰻などを用ひずに必要に應じて簡單に附く蠟がよいと思ふ。

締具には又よく牛脂か、馬油を塗附しておかぬと春の雪は殊の外水分を多く含んで居り、時としてはベチャ〳〵の雪の場合もある位であるから、水を吸收してズブ〳〵になり、延び易く、又切れ易い。注意すべきだ。

次にゾムメルシーの運搬法であるが、我々はよく兩方を向ひ合せにして特に作つた締皮で締めて肩にかけるか、同樣にして有合せの細引で用を達したりする。

又大抵の場合は、ルックサックに附けて歩くのであるが我々はあまり適當な法を知らない。故に唯無造作に束ねて横にしてルックサックの上部へ結びつけておく。併しがたつかぬだけの細工はしておく。又底面を背中に向けて交叉してルックサックの上部にいかにも樂につけてゐる外國の寫眞をた見ことがあつた。これもよいと思ふ。

最後に參考のために今年北大山岳部にて作れる夏スキーの寸法を簡單に次に述べる。

長さ　四尺五寸

幅　先部　三寸　中央部　二寸五分　尾部　二寸五分

厚さ　中央部の最も厚い部分八分、全体にて最もうすい部分約三分位

底面の溝　可成間をあけて二本丸型の溝をとる。

大体以上の樣なものである。今年は特に先端を丸くして抚を取り去つてしまつた。これは色々の點からこの方がよいと考へられたし、外國製のゾムメルシーにはこの型が多いのでどんなものか作つて見た。

材としては普通のスキー材にては幅がとれないし、不經濟な木部の取り方をしなければならないので九尺のジャムブ用スキー材を潰して作つた。これで作ると一臺のジャムブ用スキー材にて二臺の夏スキーが製作出來る。

材種はカバ材及びイタヤ材を用ひた。全部カバ材を用ひたかつたが數が揃はなかつたためである。製作は札幌中野商店をわづらはした。

三段滑走練習日記を顧みて

――三ケ年の筆者練習表より――

岡村源太郎

今年の St. Moritz の五十粁競走のコースを圖上で觀察すると、距離は五十粁であるから札幌に選定された三十粁コースとは距りが大きいが、その地形は非常に札幌の長距離コースに似て居るのである。標高差は三百米を少し超過するに過ぎないのに對して、札幌三十粁はやはり約三百米の標高差を有して居る。コースの大部分が高いアルペンの連山を深く割つて居る谷々に沿うて、サントモーリツよりポントレジナ方面に至る極く緩傾斜のスロープの登降が主なのに對して、札幌は琴似附近より盤ノ澤の谷を過ぎ手稻山麓に擴る緩登降斜面の多いコースを持つのが甚だ似て居るやうに感ぜられる。此の二つのコースに於ける地形から我々が最も優秀なる速度を發揮せしむるには、次の諸點に最も注意をおくべきであると私は考へて居る。

一、Ski mit Wachs 即ち巧みにワックスが塗られたスキーを以て、あらゆる登りコースを殆ど絶對に後滑りする事無しに走り登る事。

二、最も速やかに滑降し得るやうにスキーの製作及び處置に注意する事。

三、平地及び緩登行斜面では最高の三段滑走の速度を得るやうに技術の錬磨を計る事。

即ち現在私は登りはワックス、降りはスキー、平地は三段滑走と云ふやうな言葉で屢して行きたく思ふ。兎も角もサント、モーリツのコースを規準として考へ、之が中歐距離コースの代表的なものゝ一つであるとしたならば、又は讀者の既に本誌で知らるゝコルチナの國際大會の五十粁コースも相當注目しておくべきコースであるならば、スキー技術で最も重んずべきものは三段滑走であると考へる。他は本來のテクニクに屬しないワックスとスキーで大半解決せらるゝ要目で、競走技術は三段滑走に殆ど全てをおきたく思はれるのである。恐らく五十粁コースの大半は三段滑走の優劣で技術上の階程が定められて居るに相違ない。三段滑走の重要な事に就いて此處にくだ〳〵しく述べないが、既に本誌六十一號や六十五號でその一端に觸れておいたから參考にして頂きたい。

重要である三段滑走に對する私の練習は誠に貧弱であるが、從來の三段滑走に少し組織的練習を始めた後の三ケ年の練習表を顧みようと思ふ。辛うじて外國寫眞に依り、書籍により又獨逸スキー映畫で得た智識をこねまぜて走つた結果であるから、到底未だ滿足すべき所まで達しないが札幌の或る練習者が如何に平地を走つて居るかにでも氣付かれゝば幸ひである。

我々が三段滑走をやつたのは四年以前ではあるが、殆ど殘すべき記錄が無い。然し一九二五年からは幸か不幸か私は平地練習に最も適した場所に移住したので、其處から冬の日はよく一定の距離の三段滑走をするやうになつた。住居の直ぐ前が三段滑走の練習の際のスタートでありゴールであつた。其處より圓山南麓まで殆ど正確な距離で一三四〇米内外（二回の計測）を計測したのであるが、今年になつて圓山へ滑走又は疾走練習に行く時は大抵の場合その平地で三段滑走を爲たのである。或日は一日に二—三回往復疾走した。

從つて平地に於て三段滑走のその日〳〵の滑走感と難易の程度、スキーの變換に依る差異等には驚く程に心は鋭敏となつて來たのであるが、而もその日々に作られる疾走タイムは隨分變化性の多いものであつて殆ど豫想する事は出來なかつた。豫想タイムとストツブウオツチの一致する事は勿論無く、大抵二〇秒乃至一分の距りがあつたやうである。又今年は圓山公園に於て正確に測つた同樣な地形を持つ平地コースの練習を爲た事が多かつた。

此のコースでは或る事情の爲め今年限りで組織的練習は出來なくなり、又盛んに發展する札幌郊外であるからコースに沿うた地境は遠からず家屋が障害になる事と思ふ。私の此處の三段滑走は僅か三年で該コースより消えて行く。貧しい日々の記錄のみが日記の一隅に記されてある。

然し色々な意味で忘れられない此の三段滑走の記錄をまとめておくのも徒爾で無いと考へ、貴重な紙面を拜借する次第である。スピードは短距離コース（十粁以上）を競走する時の速度に合せる積りで努力してタイムを作つておいた。そして此のコースが約二十米以上の標高差があるので往復の平均がほゞ平地スピードそのものを示すものである標高差ある爲に往きと歸りには大抵二十秒乃至一分の相違があるのが常であつた。時にはワツクスや雪の關係で往復

共に同タイムの事も稀にはあつた。

今往復二六八〇米の三段滑走速度を書き連ねる筈であるが、それよりは寧ろ一粁に換算した値の方が參考になり易いと思はれるので、往復コース二七〇〇米に所要タイムを割當てゝ計算した一粁タイムを表に示しておく。又圓山公園での平地スピードも一粁に換算して表記した。讀者は之によつて如何に日々の速度の變化の大きいかに驚かれるであらうが、殆ど常に踏み固められたコース（スキー家の常に圓山に通ふスキー路に相當す）でありながら、如何に雪質とスキーに依つてスキーの疾走スピードに變化あるかを知る事が出來る。但しそこには身体のコンディションの影響、三ケ年間の技倆の進歩もあるであらう事も考へられる距離を二七〇〇米として計算したのは標高差ある平地コースであるから、三段滑走そのものゝ疾走成績を實際以上には良好ならしめない筈である。

最高タイムは往き五分五十二秒、歸り五分二十一秒といふ別々の記錄がある。之は平均すれば一粁平均四分を少し越えたスピードになるから相當早いわけであるが、四分以内の速度にはなつて居ない。但し此のコース限りを努力して走つたものとすれば、殊に一粁だけに力を致したとすれば、一粁三分臺で樂に走れる日が少くなかつたと考へられる。（本誌六十一號參照）

使用したスキーに依つて全て別々に記載しておく。記錄は表に示す通りである。ワックスは成るべく登降の際にも都合よいやうな塗り方を採用して、此の平地スピードは直ちに競走の時と比較出來るやうになつて居る。

1924年			19日	5分 33秒……(IA)	2月19日	5分 7秒……(M)
（月日）	（タイム1kmニ付）使用スキー		20日	5分 33秒……(Nor.)	25日	5分 56秒……(Nor.)
12月11日	5分 44秒……(St.)				26日	5分 —……(Nor.)
14日	5分 11秒……(St.)		1925年			
15日	5分 15秒……(Nor.)		1月 8日	5分 26秒……(Nor.)	3月 2日	5分 33秒……(Nor.)
16日	5分 11秒……(Nor.)		15日	5分 30秒……(Fin.)	3日	5分 30秒……(Nor.)
18日	7分 2秒……(Nor.)		28日	5分 56秒……(Nor.)	20日	5分 45秒……(Nor.)

4月 8日　(4分41秒)……(NA)
12月19日　5分 17秒 …… (K)
20日　5分 19秒……(K)
30日　5分 41秒……(NA)
31日　5分　1秒……(IB)

1926年

2月18日　4分 52秒……(K)
20日　5分 18秒……(K)
26日　5分 11秒……(K)
27日　4分 25秒……(K)
28日　4分 49秒……(IB)
3月 1日　5分 36秒……(K)
7日　4分 38秒……(K)
8日　(4分38秒)……(Nor.)
9日　(4分18秒)……(K)
12日　5分 22秒……(K)
11月16日　5分 47秒……(NB)
17日　5分 45秒……(NB)
18日　6分 19秒……(NB)
19日　(4分53秒)……(NB)
21日　5分 24秒……(NB)
12月 3日　5分 56秒……(NC)
5日　5分 26秒(午前)…(NB)
(4分44秒)　…(NB)
(夕刻)
5分 18秒　…(NB)

15日　4分 48秒……(NB)
16日　6分 40秒……(NC)
21日　4分 37秒……(NC)
(4分01秒)……(NC)
25日　5分　— ……(NB)
30日　4分 57秒……(NC)
31日　5分 35秒……(NC)

1927年

1月 1日　5分 58秒……(NB)
2日　5分 50秒……(NB)
9日　6分 20秒……(Nor.)
11日　4分 36秒……(NB)
12日　4分 11秒……(ND)
13日　4分 49秒……(NB)
14日　4分 36秒……(NB)
4分 37秒……(NB)
15日　5分 19秒……(NB)
4分 23秒……(NB)
16日　5分　3秒……(Nor.)
17日　5分　— ……(HA)
4分 18秒……(HA)
18日　5分 44秒……(Nor.)
19日　5分 01秒……(HA)
4分 46秒……(HA)
20日　4分 36秒……(HA)

21日　4分 27秒……(HA)
23日　4分 38秒……(HA)
26日　4分 39秒……(NB)
28日　4分 09秒……(NB)
29日　4分 44秒……(NB)
2月 1日　4分 44秒……(NB)
2日　4分 33秒……(HA)
5日　4分 54秒……(HB)
6日　4分 32秒……(HB)
7日　4分 27秒……(HB)
8日　4分 30秒……(NB)
9日　4分 14秒……(HB)
10日　4分 14秒……(HB)
11日　4分 19秒……(HB)
23日　4分 46秒……(HB)
24日　6分　4秒……(NB)
3月 4日　4分 39秒……(HB)
5日　4分 14秒……(HB)
(10粁　43分40秒)
7日　4分 33秒……(NC)
15日　5分 17秒……(ND)
17日　4分 41秒……(NC)
22日　5分 13秒……(NC)
25日　4分 47秒……(NC)

使用スキー

St.	……アメリカ製	ヒッコリー材	6尺4寸	Fiutfeldt式
Nor.	……オスロ製	ヒッコリー材	7尺1寸	Fiutfeldt式
M	……福屋製	アオダモ材	7尺2寸	Bergendahl式
NA	……中野製	アカダモ材	7尺1寸	Malius式
NB	……中野製	イタヤ材	6尺7寸	Langriemen式
NC	……中野製	カンバ材	6尺8寸	Langriemen式
ND	……中野製	カンバ材	6尺7寸	Malius式
IA	……飯山製	ケヤキ材	6尺6寸	山葵式
IB	……飯山製	クルミ材	6尺7寸	Langriemen式
K	……小谷製	アサダ材	6尺8寸	Langriemen式
HA	……芳賀製	サクラ材	7尺2寸	Bergendahl式
HB	……芳賀製	サクラ材	7尺2寸	Bergendahl式
Fin.	……芬國製	メーチ	8尺	アメリカ式

表に示されてあるうち各年十二月中に作られたタイムは参考とするには余りに價値が無い。雪が少い爲正確にコースに沿うて測つただけの距離以上に、遠道にコースが通つて居たからである。又昨年及び一昨年は毎年の全國スキー選手權大會への出場の爲め、最高記錄を出し得る一月下旬二月上旬に札幌に不在であつたので練習者に物足りない余白が挾まれてある。又タイムも使用スキーの關係で不良である。

練習の時の日々の狀態を一々説明し、それにスキーの關係をも結びつけてスピードの影響の狀態を詳記して研究すべきであるが、不完全な觀察の道路をくだ〳〵しく述べるよりは、一飛びして結論的の事項を次に略述しておこうと思ふ。唯讀者は之だけのタイムを參考にして得た私の觀察として、たとへ結論は誤つて居ても實驗の數の多いので補充する積りになつて頂きたい。余りに平地專問の論究を述べるのは、又一面から見れば無駄であるかも知れない。

一、雪質とコース。

最も好く滑る雪で相當のシュテムメンの役を爲す雪に於て、三段滑走の最大の平地速度を得る事が出來る。足の動作が最もよく効を奏すると共に、杖による推進がスキーの滑りをいやが上に助長する。之は殊に少し標高差ある平地コースで然うである。

コースは適當に踏み固められて居る必要がある。巧妙に滑走したコースならば十回の滑走によるコースの踏み固め方で、そのコースは先頭に走る人も終りから走る人も差異が無い（特別の深い雪の場合を除く）從つて競技會に際して新雪の降つた時は、コース係りは少くとも五名の滑走を

以てコースを踏み固めておくべきである。理想を云ふならば二〇名のコース踏査係りを競走前に歩かせておくべきである。今日猶權威ある大會に於てさへ、此のコース踏査の不完全な爲に先頭のひどく不利になる事の少くないのは甚だ遺憾の事である。五名以下の人數の踏み固めたコースを走つた時と十名が歩いたコースを走る場合とで、私の經驗に依ると表には出しておかないが常に一粁につき十五秒乃至二十秒の差があつた。不充分に滑走してあるコースを走る先頭は常に此の二十秒のハンディキャップを以て、全コースを苦しみ且つ速度遲く滑走しなければならない。十五粁競走では少くとも一分の損失を以て先走者は後走者に負けなければならない。

コースの雪質は表面の雪の性質のみで論ずべきもので無く、杖が突かれる雪面の硬さに依り、下層雪の海綿式に軟いか氷の如く硬いか等に依るものである。下層雪は硬くある方が速度早く、杖の究かれる場所も杖の突き入れ及び雪中よりの離出が妨げられない程度に硬い方がよい。然し此の有利さは登行斜面を登る時程にひどくスピードを支配しない。何となれば登行の際よりも杖の使用及び足よりスキーに與へられる壓力が少くなり、輕やかに比較的雪上に垂直に加はる力少くスキーは滑走して行くからである。

シュテムメンの要素の豊かな雪は概して粉雪である。少しく日光と寒冷に影響せられた細粒狀に近づいた雪は更にグライテンにも長じて、相當良好な最高に近い滑りを持つ。表で知らるゝ通り、十粁連續の三段滑走に四十三分四十秒（一粁平均四分十八秒）のタイムが出で、又その十粁中の或一部分の一粁スピードが四分十四秒以内であつた三月五日の雪質は、粉雪が少しく變化し粒狀になりかけた降雪後二乃至三日を經た雪であつた。此の日の正午氣溫は三十一度を越えて居たことはかなり冬に比して高溫である。もつと氣溫の低い時は四十一、二分で走れたらうと思つて居る

二、技　術

三段滑走の技術は殆ど私が本誌六十五號本項で述べたものを應用し、又その技術を正確に用ひ得る雪質の時に最も良いタイムが出て居る。平地は勿論緩登行斜面も三段滑走を規則正しく用ひるのであるが、雪質の不良で一粁六分内外も要した時は到底私の考へに從へるやうな三段滑走を區分して用ひる事が出來なかつた。

概して平地では狹義のドライシュリツトとツワイシュリツト及び杖に依る推進法、緩登行面では三段乃至猶一歩の多い滑走法、下降面は杖にのみ依る推進法とツワイシュリツトが最良であると思はれる。之が私のスキーワックス及び當コースの狀況より推しての考へである。又之が最も走り易くて最高の努力を長く續け得られる雪であると思はれた。

三ヶ年の技術の進歩が若しあるならば、それが表に現はれるのであつて、實際此の表では前年に四分臺のタイムを出すのが困難であつたのが、今年は一月二月殆ど常に五分以上を要した場合は無い程である。然し之は使用スキーが變つて居り同一スキーでも相當狀態が變化した爲に、正確な記錄の進歩を知る事の出來ないのは遺憾である。寧ろ同じスキーに依つて比較するなら近年の方がタイムが悪くなつて居る結果さへ認められる。又昨年及び一昨年度はレースに適する期間に充分な日々の平地練習の結果を札幌で見られなかつたのは、年度に於けるタイム相互の比較を無意味ならしめて居る。

然し三段滑走の技術に就いては、本誌六十五號を參考にして大差がない。

三、スキー

スキーは最も良く滑り且つ輕いスキーが最良の結果を擧げて居る。スキーの滑りは材と長さ、カーヴ、ワックス等に關係する。之等の關係より最も輕いNB及び、長いHA及びHBのスキーが最良のタイムを最も多く出して居る。ヒツコリー材のNoスキーは滑りが最も優れて居たが重量の大きい爲に優良なタイムを出して無い。短い一粁だけでも最高四分三十八秒であるのに、より滑りの悪いKスキーが殆ど同樣の雪質と努力で四分十八秒で滑つて居る。

NB及びHA等はイタヤ及びサクラである。即ち札幌の雪では日本產の材ではサクラとイタヤが第一の滑りを持つらしいが、七尺二寸のサクラスキーに比して六尺七分のイタヤスキーが平地で殆ど遜色のないのは、スキーが四百匁以内で輕い爲もあらうが更に私の使用したイタヤ材が極めて良好な滑りを持つて居た爲にも依るに相違ない。

カンバ材のスキーも相當使用したが、充分な比較を爲して無いから確言は出來ないが、イタヤに劣らぬ滑りを現はしたと思はれる日が少くなかつた。努力して走つた一粁四

分一秒の最短（？）タイムは四〇スキー即ちカンバ材である。カーヴが一粁につき十回以上もあるコースで走つたタイムであるから直線コースに近いコースであれば優に三分台のタイムである。

之に反してケヤキ、アカダモ等は甚しく滑りが劣り、たとへスキーは如何に輕くとも平地スピードは速くならない輕いスキー万能の世は過ぎて今は滑りを重んじなければいけない時である。日本の陸上選手でさへ十粁を地上三十五分で走るのは容易な事で無いのに、我々が將來その三十分台で少くとも四十分位で十粁を走り度いと思つて居るのであるから、ランニング的の輕いいでたちのホップ的の疾走では到底良好なスピードを得る事は出來ない。どうしてもスキーの滑りに助けを得て、たとへ重くても滑るスキーに乘つて滑走するのでなければ陸上のスピードにも劣らないタイムを三段滑走で得る事は不可能ではあるまいか。又長距離にその速度を繼續して行かなければならない。

杖及び締具に就いては余り注意を拂つて居ない。平地であるから杖は長い方が有利（但し最長で肩高）である事は確かであらう。締具はフィットフエルト、マリウス、山善式、ラングリーメン、ベルゲンダール等何れも殆ど大差が無く、唯履き心地だけ隨分違ふ。平地では普通の締具で全てほど同樣の結果を得ると思ふ。唯日本では未だ殆ど使用せられて居ないベルゲンーダール締具が他の締具に優るとも劣らぬ工合好さを持つて居る事を特記してをく。そして強いて締具に順位をつけるならば

(一)ベルゲンダール式　(二)マリウス式　(三)ラングリーメン式　(四)フィットフエルト式及びアメリカ式

となる。コースが平地のみでなく稍々急な登降斜面のある時は此の順位は益々明かになるか又は動搖を來すに相違ない。

ワックスは始めはパラフインを主にグライトワックスとして使用したが、最近はビーネワックスを主として用ひるやうにした。又濕雪にはパラフインとターワックス、乾雪にはビーネワックスが分ち用ひられた形になつて居る。有効なワックスの使用法に全てが適しない事は、平地スピードを大いに動搖せしめて居るが、兎も角以上の如き使用法を私は良いであらうと考へて用ひたゞけである。一体ワックスの良否に就いてはスキーと雪と滑走時間等に關する色

々のコンディションを考へに入れなければならないので、なか〳〵最適のワックスを斷定する事が出來ない。

然し大体に於てワックスが長くスキー底面より離れずにある乾雪に於てはビーネワックスで速やかなスピードが得られ、そして最も好く滑る場合は之が少しく氣温の支配を受けて粉狀を帶びた雪の場合である。スキー底面にワックスの命數多いやうに、ビーネワックスに色々の混合物の入つたものを用ひ（例へばエネテイス、オーストバイ、フイングル）又他の粘着性ワックス又は物質を混合して塗つたものである。又之等の方法でシュテムメンの要素に滑出速度を增さしめる爲にも大いに役立つて居た事は勿論である果して之が好い塗蠟法であるか如何かを述べる事は出來ないが、要するにグライトワックスとシュタイグワックスを適當にコムビニーレンさせて使用するのが最も無難で、又その方法の成功した時又は成功するやうな雪質で一粁四分近いタイムを出して居る。そして登降コースでも相當の速度が得られるやうである。

之で見るとバラフィンに賴らねばならぬ雪では良好なタイムは現はれにくい。ディスタンスレースの快速力とも云ふべきものはビーネワックスを基礎とせるものでなければ得られないと考へ得られる。但し之等の考へも貧しい經驗によるものであるから到底斷言出來ない。誤れる見解あらば讀者の叱正を乞ふ。

其の他の色々の狀態との關係に就いては、記述も不足で確からしい結論は得て居ないが、何れ詳細な發表又は猶研究を他方面より進めて行く積りで居る。即ち雪質を支配する太陽や氣温の影響がある。日の照つて居る時と然らざるとでも、相當の速度の變化がある。又練習の分量に就いても記載しなければならぬかもしれないが、此處には一部の特定コースの三段滑走だけに止めておいた次第である。不完全ながら練習中の感想を此の位にしておいて、又項を改めて廣く各方面の指導を得て詳細な觀察を述べる機會を持ちたく思ふ。

藏王日記

（自大正十五年十二月廿四日至昭和二年一月七日）

三枝茂雄君の死

額田敏
柏木民次郎

自然の叫びを聞き、その懷に抱かれつゝお互が樂しく過した時は短かかつた。東へ西へ或は南へと分れる時が來た。而し皆が山を憧がれる心には少しも變りはなかつた。機會ある度に、暇を盜んではお互に山の中で會合し一日二日乃至數日間野生の生活に如何程ノンビリした氣分になつては又各々元の通り忙しき生活へと歸り行つた事であつたであらうか。藏王山の御釜から流れ落ちてなす濁川の邊に湧く峨々の湯は又今度も吾々が暫らくこゝを根城に雪に親しむことになつた。五色温泉から廻つて二十三日の夕方遠刈田までやつて來てその翌日峨々へと登つて來た。今年は例年より雪が早くから降つてスキーには大變に具合が宜しかつた。山道で峨々の主人が若い衆を一人つれてスキーで降つて來るのに會つた。そして山の雪の有樣など聞いて登つて見ると如何にも雪は豊富であつた。イキナリ峨々へ行つてしまつてその日は半日の休養とした。

廿五日

明け方の空は烈しく澄明で星の殘光が淡く光つて居る。五色で二三日滑つたのではあつたが藏王の雪は亦懷しかつた。早速用意してスキーを着けて外へ飛び出た。直ぐ前の濁川の橋の上に立つと山は朝の太陽に淡赤く雪が輝きその蔭影が極めて強く黑き迄に濃青色の空に限界されて誠に嚴然とした景觀である。何時も乍らの濁川の水も今朝ばかり

は雪山の光りの反射を受けて五色の水が流れて居る。スッカリ天氣はいゝ。まだKもSも來て居ない。只自分一人が此の天氣には少々物足りなさと淋しさを感じさせる。而し山へ來て何時も感ずる誠に靜かな喜びは書くことの出來ないものであつた。淋しければそれだけ山氣迫り來る樣に思はれた。只何の目的もなく此靜寂の景に引き付けられる樣に登つて行くと早や太平洋が赤く光つて見える。賽の河原の下の所で後から來た東大の黑崎君と一所になり共に河原を横切つて登る内に刈田岳への中腹に來た。そして遂に刈田の頂上に來て見ると去年迄は見なかつた社前に新しい鳥居が出來て居てそれに雪が吹き付けられて美しく光つて居た。そこから直ぐに馬の脊に降り熊野岳に登り社前に風を避けつゝ食事をして居ると霧が襲つて來た。早速降ることにしてアザラシを外し一期に馬の脊へ滑り降つた。今迄幾度か來たがその雪がこれ程いゝ時に出遇つた事がなかつた何時も此の附近はガリガリの「クラスト」をなして居るのであつたが今度の雪は誠に氣持のいゝ粉雪の少し締つたスキーにはいゝ雪であつた。刈田岳へ歸つて見ると慶應の人達と丁度その頂上で遇つた。そして同時に降ることになつた。刈田の中腹迄は一所に降つて途中から分れた。雪が宜かつた爲めか今日はほとんど疲れない。峨々に午後三時過ぎに歸り着いた。その晩遠刈田から登つて來た宿の若い衆が里の便りをもたらせた。そして　聖上陛下の御崩御を傳へた。吾々は靜かに東に向つておぢぎをした。

廿六日

今日は三枝が來るはずの日である。七時半頃空のリュックサックを負つて宿を出て彼を迎へに遠刈田へ行く。朝の雪は氣持のいゝ程スキーが滑る。清水原の下の牧場小屋まで一氣に降りた。そこへスキーを預けて遠刈田へ行つて見ると三枝は丁度やつて來てゐた。直ぐに彼の荷を二分して負つて登り初めたが大變雪にかつえて居たと見えて少し雪があると直ぐスキーを着けてガリ〳〵音を立て乍らアヤシイ腰付でスキーを引きづつて行つた。彼は去年の暮からスキーを始めたのであつた。それも雪の山へ登る目的の爲めに即ち純然たる山スキーの爲めに、前から極めてよく山に行つた。それが爲に今もスキーを着けての登りには可成り平氣で登ることが出來た。前の牧場小屋からは共にスキーを着けて登つて行つた。清水原から上になつて雪が豊富に

なつて來ると三枝は一方ならぬ滿足をしたらしい。誠に嬉し相であつた。此の日も下の方は天氣は宜しかつた。吾々は上衣を脱いでシャツ一枚で登つた。賽の河原の卒塔婆まで登つてそこから降つて峨々についた。その晩三枝と二人で山で呼子笛の信號について一定の規定をやつた。

廿七日

二人で賽の河原の下を左に行つて澄川の左岸近く針葉樹林の中を歩ゆんだ。高く針葉樹が雪の塔をなして樹立する間を極めてノンビリした氣分で歩き廻つた。雪は可成り深かつた。この附近は風が當らない所と見えて樹に積つた雪も落ちないらしいし又下に積つた雪もあまりシマラないらしい。スキーを着けて膝までモグル所が多かつた。刈田岳から出て來る流れに沿ふて登つて行くと遂に刈田の中腹に出た。三枝のバロメーターは一四〇〇米を示して居た。温度は零下七度を示して居たが風の當らない所の爲めか大變に暖かに感じ手袋などはなしで居て寒さを感じなかつた。そこから降ることにして二人は並んで滑つた。そして賽の河原の上後見坂を降るとき途中から二人は直降をやつた。自分は一度轉んだ。三枝は遂に轉ばずに滑つた。そして……

……どうだい……と大變な元氣であつた。遂にその時ばかりは冑を脱いだ。賽の河原の下では慶應の人達や二高組が練習して居た。吾々は直ぐ降ることにして自分が下で昨夜きめた信號の笛を吹くと上で三枝が合圖の笛を吹いた。それで先に降つて峨々に歸つて居るとSは後から降つて向ひ側の斷崖の上で又一吹き合圖の信號をやつて降つた。その日から少々風氣味で頭痛がした爲めに早く床の内に入つた。そして夜三枝のすゝめで布團を澤山着て汗を出すべく發汗劑を飲んで彼の命ずる通り二時間汗を流しつゝ我慢した。彼が後に脊中の汗を拭つて呉れたり、シャツを代へて呉れたりして呉れた。その間隣室の東大生黒崎君一行が明日天氣よくば裏山道を名號峯から熊野に登りたいが案内役にと自分に賴みに來た。頭の具合がよくなれば行くべく約束してその夜は寢た。三枝はスキーの杖を修繕して居た。

廿八日

朝尙頭が痛い。その爲めに今日一日スキー休養とした。三枝は四月にも只一人來て裏山道を名號から熊野岳、刈田岳を廻つて來た經驗もあるし、又其の前既に一度靑根から同じく名號峯—熊野、刈田と廻つた事もあつた。そして

れ以外にも藏王の地勢は可成り精しく承知して居た。そして一行の案内役としてスキーは下手ながら行く事になり、リュックサックに種々の小道具類を詰め込んだ。シュタイグアイゼンまで持つて行かうとしたので、この雪ではまさかその必要はあるまいからよせと云つてリュックサックへ入れるを止めさせた。（その時持つて行つた品物は後に柏木氏が書いたから茲には略す）出發の際に夕方は三時半迄には是非峨々に歸る樣にしろと云ふと、何！大丈夫だよ、夜八時にもなつて歸らなかつたら捜索隊を出して呉れと笑ひつゝ朝八時に宿を出た。

その日はこの峨々の溪は靜かな好い天氣であつた。麗かな太陽は溪一ぱいに照りほか〳〵温かであつた。屋根の雪は盛に溶けて雨垂れとなつて流れ落ちた。今日の山行の人達を羨んだ（一行は三枝の外に東大生黑崎氏外二名及二高生二名）そして午後三時半に五名の人は一廻りして歸つたが三枝が歸らない。聞けば三枝さんは裏山の直ぐ登り口でスキーが谷側に滑つてそこで暫く登れなかつたのでお先に失禮して登つた。そして名號峯の直ぐ下の所で十時半食事の時三十分待つたが姿が見えなかつたからそのまゝ熊野頂上へ十二時半に登つた。自分が考へると八時に峨々を出發して十二時半に熊野岳頂上に着くことはあの裏山道の事を思ふと餘程歩度を早めなければ行けない。三枝は用心深くも色々な準備品を持つて可成荷は重つたらしい。そして一行とは餘程遲れたのであらう。四時になるも歸つて來ない五時にも未だ歸らない。邊りは暗くなつた。六時になつた尙歸らない。それで宿の若い衆芳松と二人で賽の河原卒塔婆の所まで登り、そこで例の笛の信號をやり電燈とランタンとの火を振りつゝ待つた。ランタンは風の爲めに殆ど用をしなかつた。笛は唇に凍り付いた。そしてその翌朝知れたことだが凍り付いて唇の薄い皮は破れて血が笛の口に付いて居た。靴を通して寒氣が迫つて足の指の感じがなくなつた。刈田岳の中腹以上は雲に掩はれて居るらしい。吹いて居るのであらう。三枝は歸らない。吾々二人も居たまらなくなり新道小屋迄（賽の河原の直ぐ下に新しく出來た小舍）降りこの中で火を焚いて窓の所にランタンを點火して外からよく見える樣にして十一時半迄彼を待つた。その夜を徹して刈田岳—熊野岳への捜索はその時の吾々二人の防寒具と云ひ食糧といひ、又その朝以來自分の頭痛が未だ癒

つて居ない爲めトテモ元氣が無かつた。友が生死の境に彷徨せるをも省みずして、少し位の頭痛にかこつけ自己の安逸を貪つた事は今更何とも申譯がない。遂に峨々に歸つた裏山へも黒崎氏及宿の衆が登つて呉れた相であつた。吾々が宿に歸つた時は既に先に歸つて居た。その夜は遂にそれきりで手の出し樣が考へ付かなかつた。

廿九日

三枝の友として自分一人では到底捜索は出來ない。朝慶應の西川さんの所に行き昨日からの顚末を語り、捜索の援助を乞ふた。直ぐ快諾されてこの日の捜索の爲めに一同全部出動されることになつた。二組に分れて一つは裏山を名號峯へと、他の組は賽の河原から刈田へと行く。そして途中スプールをよく調べつゝ登つて行つた。自分は裏山道を西川さんと共に登つた。名號峯までのにはシュプールは横の方へ外れたのは一つも見付からなかつた。又手を分けてその附近の谷をのぞいて見たが何もない。名號峯の上は風がさすがに強い。下の雪を吹き付けて顔を風に向けることが一寸困難であつた。熊野、五色、刈田へと雪の雲がカヂリ付いた樣になつて居た。時刻も一時四十分で先きに登るには餘りに後れて居る。この峯の上から殘念乍ら引返すことにした。茲で黒崎君に昨日の山の模樣を尋ねると、今日よりか雪は薄く風も弱かつたらしい。而し充分はつきりした事は知れない。峨々に四時頃歸り着くと仙臺より柏木氏が來て居た。Kも何も知らないでやつて來てこの變事を聞かされた時どんな氣持がしたか。

やがて賽の河原方面への捜索隊も歸つて來た。大黒邊まで登れたがそれから上部は吹雪で行かれなかつた。

峨々谷は靜かな天氣だつた。山上は吹雪いてゐたのだ。廿九日の内に熊野岳まで全コースを捜索したかつたのは皆の望みであり目的であつたのだ。兩捜索隊は吉報も凶報も持つて來なかつたのだ。事柄は重大となり不安は增して私達の心は闇黒の淵へと深く沈んでいつた。

宿の主人は里人に應援を求めに又諸方面に通信の爲に日が暮れかゝる雪の山道を遠刈田へと下つた。その夜警察と村の人々へと事情が傳へられた。彼の故鄕藤澤へ又務先東電へと急電が飛んだ。(額田記)

三十日

おだやかな朝だつた。Nは頭痛で起き上らなかつた。ま

だ二日目だ熊野岳まで行くのは少し遠乘り過ぎた。行かねば氣がすまなかつた。刈田岳まで頑張れば後はそう上りでもない長くとも四時間かゝれば行き着ける道程だ。望遠鏡をNに借りて宿の芳松さんと八時過ぎ出發した。同時に峨々の裏山から三枝君等が廿八日に通つた道を三人の人夫に熊野岳に向つて行つてもらつた。暖かかつたので私はシャツ一枚になつて登山道まで出た。大黒邊まではもう變事は無い事はわかつてゐた。それでも昨夜の内にどんな事が起つてゐるかも知れなかつたので念の爲めスキー小屋をのぞいて見た。異狀は無かつた。賽の磧に出た。カナカラ佛の小屋と卒塔婆とが見ぇ出した。小屋の入口にスキーやうの物が一本朝日に輝やいて見えた。はてはと思つて足をはやめて近づいて見た。何んの事はない卒塔塲の倒れたのであつた。Yと私は互に顏を見合せて微笑した。磧の中央に進んだ。名號峯から熊野岳まで尾根が濁川を隔てゝ、一列に見えた。望遠鏡で問題のコース一帶を眺めた。昨夜の考では或は進路を過つて谷底へでも落ちたのでは無いか、或は風を避けて溪にでも下りてはゐないかと思はれたので山腹に何かの跡は無いかと視野を何處に向けてもこれと思はれるものは目に入らなかつた。路を濁川の側にとつて大黒へ出た。何の異狀もなかつた。刈田の中腹を登り出した。お釜が見え出した。又望遠鏡でお釜の周圍と熊野岳側の斷崖とを注意深く觀たがこれと云ふ異狀も無かつた。私達二人はやうやく空腹を感じたので風蔭で私はニギリ飯をYは大きな飯盒の飯を甘く食つた。氣溫は四度であつた。風もあまり吹かず靜かな山腹ではあつたがこれからが肝要な地帶だつたので長居をせずに刈田岳の頂に急いだ。Yは右側を私は左側を斜めに登りつめた。お社は雪におほはれてゐたがそのまはりが窪地になつて避難には多少役に立らしく思はれた。二人とも引きしまつた心で言葉もかはさずによく〳〵見ても何等Sの足跡とも思はれるものは見當らなかつた。密柑の皮の破片が一つあつたきり何物も無かつた。こゝからは熊野岳の全容が見えるのであるが薄雲につゝまれて馬の脊も共によくは見渡されなかつた。私達は馬の脊を歩みはじめた。まさかあのSがこの邊で最後を遂げてゐはしまいと思つたものの不安と恐怖の心で一歩一歩進んだ道しるべの柱の線に平行に四五人の通つた跡と思はれたスキー跡がはつきり見られた。當日この跡をSが辿つたとし

たならば樂に峨々に歸へれたはづだ。廿八日以來この馬の脊まで人は無いはづだつた。それでYにはこの跡よりお釜によつた側を歩んでもらひ私はその反對側を歩んで熊野岳へと進んだ。前方に雪におほはれずに殘つてゐる石塊が現はれた時は何度も何度もはつといふ思ひをくりかへした。馬の脊を中程過ぎて三人の人夫と黑犬一匹とに出遇つた。一時半頃であつたらう。裏山から名號熊野を經て來たこの人々の話しにも何等の報知も無かつた。この人達と別れて私達二人は熊野岳上のお社へと向つた。急な登りをつゞけてゐると五人（六人か）の人々が反對側から頂に向隊伍整然と登つて來た。Sによく似た人が混つてゐたのでYは不信さうに立つてゐた。峨々からは外に人の來るはづはなかつた。急いで近づいて見た。見知らぬ人々であつた。高湯から登つて來られたのであつた。挨拶もそこ〳〵にSの遭難をかいつまんで話した。高湯からの途中の異狀の有無もたづねた手がかりも聞けなかつた。念の爲め歸路に思ひ當る事があつたら又高湯へ下りたかどうかを知らしてもらふやうに約して別れた。午後二時頃であつた。山への初日ではあつたし少々雲が掛かつてゐるので風は殆ど無かつたけれども歸路についた。

今日の搜索で普通の進路にはSは居ないと云ふ事がはつきりした。

馬の脊で別れた人夫は新關を廻つて歸つて來た。裏山へ出た青根の消防隊も歸つた。皆な何のたよりも齎たらさなかつた。空しく日は暮れて空はすみ渡つてゐた。

署長さん、青根遠刈田のお歴々、新聞記者それから刈田神社の社司、當日Sの連の人二人、宿の主人、今日山に出た人夫の一人といふ多人數の集つたS搜索に關する會議が夜に入つて開かれた。私はNにうながされておこがましくも友達といふ格で同じ席に顏を出した。種々の議論が出た。色々の例が持ち出された。仙臺二中生の遭難、白河原へ迷ひ込んで不歸の客となつた三人の獵師の話、方向を間違へて實澤村へ行つてしまつた硫黃會社の人々の話しなどが年寄の人々から出された。Sが當日落伍した地點があまりに峨々に近いので正確と思はれる豫想が頓と出なかつた。實澤口に下つたか、白河原へふみ込んだか、お釜の斷崖に墜落したか、刈田、熊野の間を滑るにまかして杉ヶ峯の方面へ深入りしたのではないかなどと想像がめぐらされた。

Sはこれ等の間違ひをするにはあまりによくこの邊の地形に精通しゐたはづであつたのだつた。三月にはこの邊を單獨で盛んに活動をしたはづだつた。地圖を讀むことも好きで上手であつたはづだつた。それにこの藏王には夏山は十年も昔からの古なじみのはづだ。十四年の暮から正月にかけてはスキーをこゝで始めたSなのだ。私にはどこにどうしてゐるのかさつぱりわからなくなつてしまつた。會議の結果はよんどころなく名號峯一帶の地を中心として熊野岳へかけて卅一日に大捜索をすることにきまつた。

山行の初日のつかれは私にねむりをうながした。明日は青根、遠刈田の若者達の心行くばかりの捜索が出來るのだと思つた時私はうれしかつた。生か死か、私には死はどうしても考へられなかつた。(此稿未完)

六年目を送りて

山口生

本號即ち第七十二號倍大號を以て「山とスキー」第六年目刊行を終るのである。今更の樣に月日の流れの早いのに驚くと同時に何かしら肩から荷が下りた樣な感じがする。

六年目の終りに臨んで何を書いてよいか見當がつかぬが色々な意味で私には思出の多い年だつた。

まづ山とスキーの會事務所が今までの化物屋敷然たる舊居を引きはらつて現在の場所へ引越してこゝに新しく益々意味ある仕事としての會の行動を開始したのだ。

新事務所は能率增進のため廣田君小野君及び小生の三人が頑張つた。勿論小生にはこれと云ふことは出來ない主として二君の力で無事に六年目がすごせたわけである。

まづ近頃のスキー理論があまりに實際をはなれて科學的末梢に向ふ傾向があるのでより通俗的理論を徹底させるために廣田君の提案で「スキーテクニックの研究」欄を設けた。これも氣がついたら大分前述の傾向を帶びてしまつてゐたのは何とも申譯がない。しかし實際なるものは現在を知ることが出來るが理論は前途をまで知らしめることが出來るものである。人間は決して現在に滿足をしないものにきまつてゐるから傾向として止むを得ないとも思ふし、又かくなるべきである。これは又日本のスキー界、若しくは世界のスキー界の傾向の樣である。これを一概に形而上學的遊戯だなんて云ふべきでないと思ふ。

雜誌の方はその位だがその他スキー部の十五週年の記念出版も主として會の方でやつた。これは又奪ひ合ふ樣になくなつてしまひ失望された方が少くなかつた。

又二月には「總指揮山とスキーの會、映畫雪の樂園全二卷」と云ふのをスキー部の選手連の努力でものにした。續いてこれが札幌に於ける五日間の公開を主催した。その評判たるや素晴らしく日本にはめづらしくよく撮れたスキー映畫となつた。

かくする内に第六年目が終つてしまつたのである。そして同じ屋根に起居してゐた二君は醫學士廣田戸七郎、醫學士小野修となり醫學部副手附屬病院醫員となり近き將來に

は醫學博士たらんとして終日を研究に勉勵されてゐる。何だか世の中が變つてしまつた樣な氣がする。

最後に簡單ながら感想が述べたい。スキーの見解に競技方面と登山方面との二潮流あるは爭へない。この二方面は一つになつて今までのスキー發達史を作つて來たがこの二つは全く性質相反する點が多い。故により進歩せんには各々が獨自の道を開拓しなければ望み得られない。しかし私にはこの二つが全々別個の存在となつてしまふべきであらうとは考へられない。各一方面のみの發達だけでは完全なスキーの發達とは云えないと思ふ。この點に於てこの山とスキーの會の存在は相當意義あるものと考へるのである。この機關に於てスキーの二方面の研究の綜合を形成しつゝ今や世界的にならんとする日本スキー界の發展を完成せらるべきであると信ずるのである。

又六年目を通じて色々と御後援下さつた方々に感謝を致します。就中大島氏、在獨の木原氏、麻生氏には厚く御禮申します。そして又新しき潑溂たる氣に滿ちて入らんとする第七年目に尙一層の御期待と御後援を望み今はすぎ去つた六年目を過去の扉の中に送りたいと思ひます。

寄贈會報

山みち	第三號	山岳會
山岳	十九號	近畿山岳會
山嶺	四月號	東京野歩路會
山の叫	四月號	美登里山岳會
山岳時報	第八年一號	城南山岳會
ペデスツリヤン	九十號	神戸徒歩會
キヤンピング	四月號	ジャパンキヤンプクラブ
山の叫	五月號	美登里山岳會
山岳	二〇號	近畿山岳會
キヤムピング	五月號	ジャパンキヤムプクラブ

H. U. S. V. 新着圖書

På Skidor		1927
臺灣山岳	第一號	

彙報抄錄

一九二八年度國際オリムピツクスキー競技大會

時日　自一九二八年二月十四日至同十八日
場所　瑞西サン・モリツツ（St. Moritz）
日程及び競技種目
二月十四日　五十粁
二月十六日　十五粁乃至十八粁
複合競技のディスタンス
二月十八日　純ジャムプ競技
複合競技のジャムプ競技

本シーズン（一九二七年度）に開催されたる國際スキー聯盟公認各國スキー競技大會

フランス　二月九日—十三日　シヤムニー
イタリー　二月三日—六日　コルチナ・ド・アムペツツオ
ノールウエー　三月二日—五日　ホルメンコーレン
スウエデン　二月五日—六日　ストツクホルム
チエツコスロバキヤ　一月廿七日—卅日　スヴイチニア

（全日本スキー聯盟公報による）

大學學生國際スキー競技會

期日　一九二七年一月十四日（金）十五日（土）
場所　瑞西、クライネ・シヤイデック（二〇六四米）
參加學生　ベルン、ケンブリツヂ、フライブルグ、グラーツ、カル、スルウーエ、リイレエ、ミユンヘン、オツクスフオード、ストツトガルト、チユリツヒの各大學學生
競技種目
14/1　スラローム　滑走距離200m　Anstutz(Bern)　56.6秒
〃　17K.M.　Schneider(Karlsruhe)　1時13分35秒
15/1　ジヤムプ　ユングフラウシヤンツエ　Stieglitz(München)　18點
〃　滑降競走　約4K.M.　Reuge(Zürich)　6分85秒
〃　複合競技　Mugler(Karlsruhe)　14點890
是等の大學スキー聯盟に於ける優勝者は、國際大學學生選

手權保持者として認むることになつて居る。

今度の競技會の區域は、クライネ、シャイデツクから一二七六米のシルトワルドまで、迂回して居る地域で中心點としてラウベルホルン（二四七五）の肩をとり、歸途はウエンゲンアルプのコースを作つて居る。

ユングフラウシャンツエは一七〇〇米の高所にある。

審判官　ドクトル・ヘンリイ・ヘイク、ドクトル・レーゼン、アーノルド・ラン、ドクトル・グルトネル

スラローム滑走の距離は二〇〇米

十七粁競走のコースは總登行距離は二五〇米、この間蜿蜒たるコースで困難なコースであつた。今冬コルチナに於て充分なる練習を積めるミユンヘン大學の連中は、非常に巧みに滑走して居た。コースの雪質は競技中申分なかつた。

競技中シユナイダーは、短い歩調で巧みに走り、ムーグレルは反對に廣い歩調で走つて居た。杖による推進滑走は非常に滑降を助けた。

ジャムプ競技は、ミユンヘン大學のステイグリツツ、グラーツのバウムガルテン、ミユンヘンのラープ等は四四米飛んで居た。此競技ではドイツの學生が非常に優勢であつた。

滑降競走は場所の見通しのつく處で、一部分は右側がウエンゲンアルプの方まで下つて居る急な斜面で、ラウベルホルンの西斜面に當る彎曲したワルドゲレンデで廻つて、ギユルムスビユウルの北に行つて、一〇〇〇米ばかりの素張らしい雪の處を下降してシルトワルドでゴールになつて居る。この競技ではスウイスの學生が優勢で之に次いでイギリスの學生であつたが、イギリスの學生は此のコースに完全に慣れ切つて居た。

臺灣山岳會創立

我々に又別種の興味を起させる熱帶地の山岳の多くを持ち、その標高に於ても遙かに我々を威壓せしむる山岳の多くを持つ臺灣に新しく臺灣山岳會が創立せられた。而して日本に於ける新しき山岳が研究されてゆくのを心から喜ぶ

會長　後藤文夫
代表者　生駒高常

又同會にては毎年四回機關誌「臺灣山岳」を發行し第一號創刊號は既に發行された。同誌によれば臺灣には一萬尺以上の高山四十八座、八千尺以上のもの百餘座を有する由

『山とスキーの會』會則

一、山とスキーの會はスキー及び山岳に關する月刊雜誌山とスキーを發行する爲に北海道帝國大學文武會スキー部關係者の組織する會である。

會員は札幌在住會員と札幌在外會員とに分つ。

二、必要に應じ雜誌の發行以外にスキー及び山岳に關する各種の事業を行ふことあり。

三、會員は幹事會の推薦により會則を承認し出資金一口以上を引受けたるものに限る。

四、出資金額は一口金貳拾圓とする。會員は此範圍内に於ては常任幹事の指定により何時にても拂込をなすべきものである。

五、會員退會するときは常任幹事に通告しなければならぬしかし既に拂込みし出資金は返還しない。會のため不都合あるときは幹事會の決議により除名することがある。除名の際は拂込出資金を返還するも在會中要した各種の費用を精算する。

六、會員中會務にたずさはるものを幹事とする。

七、幹事の互選により三名の常任幹事を定め常に會務に當ることゝす。

八、必要に應じ特定の事項に就て委員を置く。

九、毎月第二水曜日研究會を開く、常任幹事の必要と認めたるときは臨時之を開くことあり。

一〇、協議事項の決定は出席幹事一致の意見による。但し幹事會は幹事總數二分の一以上でなければ成立しない

一一、凡て役員は幹事會に於て定める。

一二、毎年一回五月會員の總會を開き、會務の報告をする幹事會に於て必要と認めたる時は臨時之を開く。

一三、會員は會務につき幹事は質疑し又は提案する事が出來る。

一四、會則の變更、その他重要なる事項は總會に於ても在札會員三分の二以上の賛否によりて決定する。

山とスキーの會現在會員

相川正義　阿部謹吾
赤松動　青木三郎
青山馨　伴素彦
長谷川敦　平井左門
平塚直秀　廣田戸七郎
本田治吉　稲積猶
岩森秀夫　伊藤健夫
加納一郎　小林一勝
小森五作　桑森一郎
松川五郎　三田村健太郎
宮城孝治　村本金彌
宮澤精　三戸動
並河功　内藤克三
中野誠一　南波初太郎
西川櫻　岡田二郎
岡見清二　緒方直光
岡本三男　岡村源太郎
大久保鐵二　大島幸吉
緒方温光　佐々木政吉
小川玄一　須藤英雄
須藤宣之助　田口鎭雄
瀧田次郎　高杉正樹
徳永熊雄　龍田不二雄
田中二郎　内海榮郎
和辻廣樹　山極三郎
山口健兒　北大スキー部
小野修

五月廿七日第六年目總會に於て會則變更。
退會者　伊藤秀五郎

實演することが出來る。

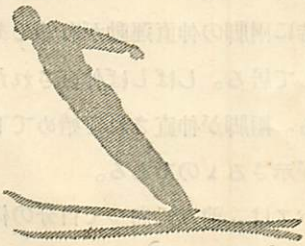
体の此前方に突張る運動は踏み切りの初めに於てジャムバアが後方に深く懸つて居れば居る程、そして前方への懸垂運動が強ければ強い程、そしてうんと前に懸らうと考へる程、それだけ力强く實行せねばならない。若しも体が左樣に力强く前方に投げられたならば、此運動を空中飛行中に於ても尙續け得る。そしてジャムバアは飛躍の第一階梯の間に愈々益々前方に强くかゝつてくる。此處では自然的にやる。

そして足が土地を離れるや否や最早振子運動はなく、その時には足は廻轉軸を失つて終ふ。そして更に体は一つの軸即ち体の重心點によつて進んで居る軸の廻りに運動して居る。

此踏み切り方法の模範的寫眞は四三頁第三列で示して居る。

踏み切り中で、飛躍に對する下肢の力と足の力とによる体の前方突出運動の完成は、此繪によつて明瞭に知ることが出來る。即ちシャンツエをジャムバアが離れた時には、未だ殆んど前傾姿勢になつて居らぬ位であるが、飛躍の最初の半分の過程に於て、ジャムバアの前傾は、明かに加はつて來て居る。

實際に今述べつゝある方法は、体に必要な前傾を與ふるであらう。然して何時も必ずしも正しく應用されないかも知れない。（未完）



うんと前方にかける。斯樣にすれば兩脚を急に上方に伸ばすことによつて――前方に体を屈し過ぎて居る位の姿勢で上体を不動に保つて居る際に――その關係で大腿部は胴の前部に持ちあげられる。次いでさうゆう風になると惰力の法則によつて、顫頑(ブランコ)運動は前方に働かねばならない。此体の強い前傾運動は踏み切りまでの準備姿勢中では無効で、下記に述べる樣に踏み切りに於て上体を前へ投出して始めて有効なものである。此場合に於ける主要點は体の重心點が、已に爪先或は足の前方に置かれてあるならば、最後の一氣に兩脚を伸張する動作によつて、大腿部の高持姿勢が始めて有効になるものである。

上体の平均保持姿勢に當つてとらるゝ此前上傾の顫頑運動は、体を前方上傾する點に於て、水中にあるダツ（魚名）の飛翔の如く有効なものであらう。そして上体を一氣に起すことゝ、兩腕を振り上げることによつて、反對運動がなされる此二つの運動の作用と反作用とによつて、大いに前傾ともなり、僅かに前傾ともなる。そして之はジャムバアが爲すものである。

其時ジャムバアは上体を前方に屈して、シャンツエを離れる。そしてその時上体を前方に屈してシャンツエを離れる。そしてその時上体は斜面に垂直となり、兩脚は多少の鈍角を作る。

強い前傾姿勢の目的を達せんとする第二の方法について、實際の場合を說かう

之は已に記せる如く踏み切り姿勢をジャムバアがとつた時にジャムバアに一定の体重の前傾を有効ならしむるものであつた。即ち靴踵上での体の前傾は爪先で上方に、然し踏み切りに際して下肢は第一に足に對して踏み切り姿勢の時の樣に曲げられない。それ故同時に兩脚の伸直運動が有効である。そしてそれが自然的に足關節にも有効度を示して居る。しばしば伸直されたる体が全く爪先で靴の踵を超えて前方にかけられる。兩脚が伸直されて始めて下肢と足とが一つの角を作り、前方に突つ張る運動が示さるゝのである。

此運動によつてジャムバアは、前方に向つて自分の体に一つの衝動を與へることが出來る。そしてジャムバアは靴の踵を回轉軸として前方に懸る。若しも此事を實際意識的にして見やうとする人があるならば、自分の足先を一つの敷居に壓しつけて屈身姿勢になつて後方に離れて居る。そこで体を起すことが苦しければ頭をしきり戸に對して壓しつける。さうすれば十分に丁度今書きつゝある運動を

を堅く結びつけて居る締具に關係あるもので、是は本質的に支點としては問題にならないものである。

この二つの要素即ち支點と惰力とは、アプローチのスピードが少いジャムプの時、又は僅かの速度によつて起る空氣の抵抗を有するジャムプに於て、ジャムパアが遠くへ飛ぶ氣持で踏み切る力によつて自分の体を前傾にする爲に何時も必要なものである。そこで此理由によつて、踏み切りに於ては、兩スキーは地上で壓せられ、そしてスキーと雪との間の摩擦は稍々大となる。

然し此踏み切りの時に於てもジャムパアは、反對に僅かに陸上競技の巾飛びの樣に全足底から踏み切りをする。

然し乍ら如何に滑走のスピードが增し又それによつて生ずる空氣の抵抗が增して、しかも前傾姿勢がとり得らるゝかと云ふに、巾飛びの時の樣な前方にかゝる飛び方は、必要なる前傾姿勢をとる爲には、本質的に何等の役をも爲さないのである。

吾々は吾々の寫眞によつて實際と理論との一致することをも亦知ることが出來る。凡べての寫眞で兩脚が正しく完全に伸びて居る瞬間には、兩脚はシャンツエの平面に直角になつて居る。更に吾々は凡べてのジャムプの寫眞で踵がシャンツエを離れた時即ち兩脚の完全に伸び切つた時には、兩脚は水平の兩スキーを下向きにして居ることをも亦知ることが出來る。然し若しもジャムパアが、長飛躍をする氣持で、足蹠から前方に蹴出すならば、踵はスキーから離れねばならない。然し夫れは吾々の寫眞の資料では決して見て居らない。私は非常に多くの踏み切りの寫眞を見て、唯一度非常に極端に踵がスキーから離れて居るのを見たし、もう一回は極く僅か踵の離れたものを見て居るにすぎない。

斯樣に多くのジャムパア達で踵をスキーから離して飛んで居るものは、全く自分の記憶では憶ひ出せぬ位で、實際には稀に見る事柄である。

然らば如何にしてジャムパアは、踏み切りによつて强く前方に体をかけるか、之は、次の樣な風にしてやるのである。

兩足と兩脚とで前方にかゝつて行く僅かの力で爲すことが出來る。この方法には二つあるが、實際は兩方を結びつけてやつて居る。

踏み切りに對する準備姿勢の時に体重が主に足蹠に落着いて居る位に、上体を

有効であり、そして可能であるがシャンツエまでの前程の長いシャンツエでは大して効果はない。

ジャムバアはシャンツエまでの前程で体重を後方に殘すと平均を失ひ易い。そして遂には非常に後ろに殘つた姿勢になつて有効な踏み切りが出來なくなる。初心者は往々此欠點に陷り易い。それ故特に初心者は此點に注意を拂はねばならない。若しもアプローチが上述の樣に凹れて居らずに、次第にシャンツエに移り變つて居るならば、此方法をとる必要はない。

そしてジャムバアは、此前傾姿勢を兩下肢と兩足の力に俟つて目的を達する樣につとめねばならない。ジャムバアは靴と締具によつて堅くスキーに結びつけてある爪先をスキー上で、上方にそして踵を下方に壓す樣にする。下肢に對する兩足の屈曲によつて彼はそこで下肢を引きそして爪先にかけてある体全体を踵の上で前方にやることになる。此体の前傾運動は、滑走によつて生じて來る速度と共に增加しつゝある空氣の抵抗に打勝つて爲さねばならない。此運動は次第によつてより力强く、又は暗示的に實行し得らるゝものである。

踏み切り自身は、旋光的な兩脚の伸直によつて、爲さるゝもので、其際上体は兩腕を前方高くに突き出して反動的に高く起されるものである。是によつて一定の前傾姿勢とならねばならない。

かくして体は兩脚の素早い動作によつてシャンツエの前で突き出される。その突き出る程度は、殆んど完全にシャンツエの平面に對して直角である。私は此事を明確に說明しやう。それはスキージャムプが非常にしばしば固定して居る場所からの立巾飛びと比較されるから。此スキージャムプと立巾飛びの比較は私は謬見であると思ふ。

若しもジャムプが立巾飛びの時の樣に兩脚と下肢の力によつて爪先（足蹠）から前方に蹴離し得るならば、支點を後方に持たねばならない。そして彼は前方に蹴離れることが出來るであらう。然し此支點は滑走操作に對しては、極く僅かの量に過ぎないところの滑走しつゝある兩スキー上に置かれてあるに過ぎない。

理論的に支點に關係して來るものは、雪面上にあるスキーの摩擦と全滑走に於ける兩スキーの惰力とである。所が滑走しつゝあるスキーの雪面上の摩擦は僅かなものであり、又スキーの惰力も亦兩スキーの僅かの量をジャムバアとスキーと

へ合すことが出來ない時は、一方の足を他足の前方に少々出して兩スキーを揃へても差支へない。然し兩足は半足長以上互に引離してはいけない。

上肢と下肢とは約九〇度の角度を作る位に屈して、兩膝頭を前斜方に傾ける。そして上体は体重が主に足蹠に載る位に前方にかける。此姿勢になると兩膝頭の鉛直線は明かに兩足趾を超えて前方にある。兩腕は前下方に伸ばすのが最も良い

此姿勢によつて始めて踏み切りは有効である。兩脚を素早く伸ばし、上体は兩腕を前方に投げ出すと同時に一氣に起して前方に投げることが出來る。此上体の前傾の結果からして一般に全身の前傾姿勢が生じて來るのである。そして全身の前傾姿勢をとることは飛躍者が空中にあつて、無條件に必要なことで、是は一方に於て空中にある間ジャムパアの体を後方に押し返さうとする空氣の抵抗作用に打勝つ効果のあるもので、他方に於ては、空中の終りにあつて着陸斜面に對して体を正しい位置に持ち來す爲めのものである。

前傾姿勢は水平線に對して直角になることを意味するものではなく、むしろそれ以上に前方に体を傾けることである。

アプローチの滑走中にとる屈身姿勢では、体重を大部分踵にかける。そして踏み切りに移る前程では上体を次第に層一層前方にかける。その際には体重を全足或は足蹠のみに置く。が然し決して其時踵をスキー底から離してはいけない。

此体重を前方にかけて行くことは、アプローチとシャンツエとの間が鋭く凹れ込んで居る樣なジャムピングヒルで爲す。つまりさうすれば水平のシャンツエ上を兩スキーが滑走する際に制動せずに濟む。然し体はそこまでの速度の方向に、更に前下方に動かし、事情に應じて、足先の前方に持つて行く。かうした凹れ込みのあるシャンツエでは、その凹れに一致する樣に兩足を下方に壓迫せねばならない。それと一諸に体は餘り前方に屈し過ぎてはいけない。

是に反し若しもジャムパアが、高い屈身姿勢をとつてシャンツエの前程に滑走するとすると、ジャムパアは更に此下方に壓す兩足の壓迫を前下方に利用することが出來得る。

更に又二、三回の練習によつてこの壓迫力を彈性的にとらへ、そして力强い踏み切りに利用することが出來る。

然し此彈性的にグングンと調子づけてやる足の壓迫力は短いシャンツエでたゞ

スキーテクニツクの研究

スキージヤムピングの踏み切り法

著者　ドクトル・バアダー
ハンス・シユネーベルゲル
抄譯　廣田戸七郎

最近の研究で説明するならば、以下記述されて居ることは、彼のR.Stroumann氏の飛行機の空中力學に一歩を讓つて居る感があるものと見らるゝかも知れないが、兎に角此考察も吾々が研究するに見るべき一つの權威を有するものと私は信じたい。此處に説かれて居る説は所謂強い踏み切りをするTiefe Sprungに屬すべきものである。

踏み切りはジヤムプ技術中最も重要なる部分を止めて居るものである。此踏み切り動作の如何によつて全ジヤムプの運命を凡そ決定することが出來る。

踏み切りは一方に於て体の空中飛行に對して正しき位置を與へ、他方に於て飛行距離を大にするものである。

如何に最近力强き踏み切り、精一杯の踏み切りが重大視されて居るかを吾々は多くのジヤムプ競技會に於て見ることが出來る。

實際競技會に於て優秀なるジヤムパアは、悪しい踏み切りをして飛んで居る自分の相手を距離でしばしば一〇米乃至夫れ以上も引離して居る。

前章ではジヤムパアのアプローチ滑走姿勢について、精細に記述して來た。その姿勢でジヤムパアは愈々速くシヤンツエに近づいて行く。そしてジヤムパアは凡そアプローチからシヤンツエに近づいて行く時、そのシヤンツエに移り變る邊で踏み切り動作を爲すべき姿勢をとらねばならない。つまり其個所迄とつて來たアプローチ滑走姿勢より堅くならぬ程度で兩膝及び兩スキーをよく揃へ合す。そして兩足を同じ高さに持つて行くのである。然し兩スキーを締具の爲に完全に揃

山とスキー

第六年　總目錄

自一九二六年六月　第六一號
至一九二七年六月　第七二號

札幌　山とスキーの會　發行

山スキー

第六年 總目錄

第七卷 第二號 至 第六卷 第一號

自一九二六年六月 至一九二七年六月

發行所 山スキーの會

山とスキー第六年目次

（自一九二六年六月第六一號
至一九二七年六月第七二號）

論　說

所謂「シープンクト」に就て……柳　壯一……（二）
登山史上の人々……ゲオルク・ウインクラー小傳……大島亮吉……（六八）
登山史上の人々……エミール・ザヤヴエル小傳……大島亮吉……（一〇一）
燕麥黨私見……伊藤秀五郎……（一六一）
一般スキー術の指導と講習に就ての一端……廣田戸七郎……（一九七）
登山史上の黃金時代……大島亮吉……（二一六）
獨乙に於けるスキーの言葉……H. Schneider 本田治吉譯……（二三三）
登山史上の人々……エドワード・ウインパー小傳（一）……大島亮吉……（二三七）
登山史上の人々……エドワード・ウインパー小傳（二）……大島亮吉……（二八〇）
登山史上の人々……レスリイー・ステイブン小傳……大島亮吉……（四一五）

スキー術

スプルングラウフの研究……麻生武治……（六）
平地滑走のスピードに就て……岡村源太郎……（一〇）

所謂標高差とレコードの關係……岡村源太郎…(四四)
スプルングラウフの研究續篇……麻生武治…(八四)
初心者及熟練者に與ふるスキージャムピング練習要綱……廣田戸七郎譯…(二二九)
スキー滑走の二要素に就て…(1)……岡村源太郎…(二三二)
スキージャムピング用スキーの研究……廣田戸七郎…(二六七)
スキー滑走の二要素に就て…(2)……岡村源太郎…(二八六)
スキーのワックス……麻生武治…(二九二)
スキー遠距離飛躍とその力學に就て…(1)……R. Straumann 青木信三譯…(三〇五)
スキー遠距離飛躍とその力學に就て…(2)……R. Straumann 青木信三杉山又雄譯…(三七五)
三段滑走練習日記を顧みて……岡村源太郎…(四五二)

登山研究並に紀行

ニセイカウシユツペ山と石狩北見國境の山……須藤宣之助…(三〇)
石狩岳の登路に就て……佐々木政吉…(三七)
春の東北朝日岳……原忠平…(八六)
富良野岳登攀の思出……赤松勳…(一二五)
冬季登山と之に應用さるゝ二三のスキーテヒニーク……麻生武治…(一二八)
冬雪崩…特に板狀雪崩に關して……大島亮吉…(一二九)

札幌岳と觀音岩山……平塚直秀…(一四四)
霧降る湖に……館脇操…(一七七)
冬雪崩…特に板狀雪崩に關して(承前)……大島亮吉…(一八五)
樂しかつたスキーの八日間……Iganz karl Gsul 小川泰譯…(二二三)
再び高山疾病に就て……本田治吉…(二七九)
暑寒別岳へ……山口健兒…(三三九)
上ボロカメットク山……井田清…(三五四)
天鹽岳と北見峠附近……原忠平…(三九四)
丘……館脇操…(四二一)
夏スキーと其の利用……廣田戸七郎譯…(四四〇)
夏スキー(Sommerski)に就て……山口健兒…(四四六)
藏王日記……額田柏木民次郎敏…(四六一)

雜錄

海外消息……松方三郎 今廡生泉武治…(一六)
一九二六年の瑞西スキー選手權大會記錄……君剛一生…(二〇)

會とその仕事について……廣田生……（一三）
「スキーテクニックの研究」欄を設くるに當つて……廣田生……（五一）
外國通信……麻生武治……（五三）
C. J. Luther
露西亞に於けるスキースポーツ……岩森秀夫譯……（九〇）
秩父宮殿下御登攀の話……廣田生……（一三一）
海外通信……麻生武治……（一六四）
フィットヒールド氏を訪ふ……内山數雄……（二三九）
時重大……君……（二四二）
直滑降の味ひ……なほみつ生……（二九四）
老婆心……TOS生……（二九九）
完成近きサツポロシャンツエ……廣田生……（三〇一）
獨乙スキークラブの練習會……麻生武治……（三五七）
海外通信……木原均治……（三六一）
麻生
後藤一雄
國際スキー聯盟主催一九二七年國際スキー大會……木原均……（四〇二）
六年目を送りて……山口生……（四六九）
彙報抄錄……

スキーテクニツクの研究

ゲレンデ・スプリンゲン……廣田戸七郎譯…(六六)
ヒント(一)(二)……中野誠一…(一〇〇)
スケート式滑走術……本田治吉…(一三八)
所謂三段滑走及び其應用に就て……岡村源太郎…(一五六)
ディスタンスレースの呼吸法に就て……Dr. W. Knoll 氏述 山口壽一譯…(二三一)
フライトの話……麻生武治…(三三六)
調和せる呼吸法……岡村源太郎…(三七四)
スキージャムピングのアプローチの姿勢と滑走法……廣田戸七郎譯…(四一四)
スキージャンピングのアプローチの踏み切り法……廣田戸七郎譯…(四八〇)

寫眞版

樹氷……小竹實
高潮…(ルード君の飛躍振り)……
シュミツド君……
トムラウシ岳より望める石狩岳……山縣浩
ニセイカウシユツベ山……須藤宣之助
アツモリサウ……岡田喜一

St. Christoph am Arlberg……廣田生
築造中の北大ヒユツテ……麻生武治
Glocknerの連峰……石塚照雄
奥穂高岳とそのジヤンダルム……山口健兒
狭薄岳頂上より見たる札幌岳……和辻廣樹
フエルドベルグ山上……長谷川敦
穂高屏風岩……Arnold Lunn
フイツトヒールド氏最近の書簡及肖像……C. J. Luther
ドレースプルング……
Finsterraarhorn hütte に於かせられる秩父宮殿下……
海外に雄飛する麻生君……
Geländesprung……
上ホロカメトツク山附近……和辻廣樹
直滑降……
富良野岳……和辻廣樹
コルチナの大會にて……
樺太春日峠……
テイネパラダイスヒユツテ……
横尾谷より見たる南岳……山縣浩
カールセン氏の飛躍振り……

「山とスキー」バックナンバー

唯今左の號數の殘本を所持して居ります。御希望の方には喜んでお頒ちします。

第一年目

一號—十三號　絶版
十四號十五號　僅少

第二年目

十六號十七號　絶版
十八號—二十六號　僅少

第三年目

二十七號—三十號　僅少
三十一號—三十四號　絶版
三十六號　僅少
三十七號　絶版

第四年目

三十八號—四十九號　僅少

第五年目

五十號　極少
五十一號—五十三號　僅少
五十四號　絶版
五十五號　僅少
五十六號　絶版
五十七號—六十號　僅少

第六年目

六十一號—六十五號　僅少
六十六號　極少
六十七號　以下僅少ながらあります。

右の內二十六號及び五十號は倍大號につき定價金六十錢、他は何れも一部金三十錢であります。

昭和二年四月調

山とスキーの會

優秀ナルスキートキー用其

小樽

梅屋運動具店

第二回畜産工藝博覽會ニ於テ

一等賞金牌受領

登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川四七一二番

振替東京六一二七番

自信ある本年度製作品

SKI HEIL
スキー
ト
其用具全般

中野商店

ツバメ印スキー

斯界第一
大量製産

札幌

特許商標

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に趣味を持たれる方が一人でも多くお讀み下さることをお願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことをお願します又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、、。を一字とし、行を更めるときは一字下げること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S・系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包裝中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定價　金參拾錢

＊前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

＊御送金はなるべく振替にてお願致します。

＊六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

＊前金の切れた時の御知らせは最後の分の包裝中に同封して御送りします。次の御送金あるまで配本を見合せます。

＊本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、緣故の有無にかゝはらず雜誌の代價は頂きます。

昭和二年五月廿八日印刷
昭和二年六月一日發行
（毎月一回一日發行）

編輯者　山口健兒
印刷兼發行者　廣田戸七郎
印刷所　札幌印刷株式會社
北海道札幌市北一條西二丁目
發行所　山とスキーの會
北海道札幌市北五條西十一丁目二番地
振替口座小樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo
No. 72. Julio 1927. Sapporo. Japanujo.

大正二年七月二十七日第三種郵便物認可
昭和二年五月廿八日印刷納本
昭和二年六月一日發行

山とスキー 第七十二號

定價金六拾錢

Mimatsu Special Sporting Goods
for
Everything in Summer and Winter-Sports.

美滿津特製

夏と冬との各種スポーツ用具！

■ 型錄「春より夏へ」進呈 ■

HONGO, TOKYO, JAPAN.
MIMATSU & COMPANY, INC.

合名會社
美滿津商店
東京、本郷、赤門前